

美濃金山城跡発掘調査報告書2

－主郭・東Ⅰ・米蔵跡・西Ⅱ－

2025

岐阜県 可児市
滋賀県立大学

美濃金山城跡発掘調査報告書2

－主郭・東Ⅰ・米蔵跡・西Ⅱ－

2025

岐阜県 可児市
滋賀県立大学

例 言

1. 本書は、令和4年度～令和5年度に実施した可見市兼山字古城山に所在する史跡美濃金山城跡の第10～11次の発掘調査報告書である。可見市が滋賀県立大学と支援委託の契約を結び、調査を実施した。
2. 調査期間及び調査組織・担当は下記のとおりである。

調査期間

第10次調査 令和4年8月29日～9月11日 第11次調査 令和5年8月21日～9月17日

調査組織

令和4年度 可見市文化スポーツ部文化財課

文化スポーツ部長 三好誠司 文化財課長 飯田好晴 文化財係長 松田 篤

令和5年度 可見市経済交流部歴史資産課

経済交流部長 渡辺勝彦 歴史資産課長 飯田好晴 文化財係長 松田 篤

令和4・5年度 調査担当

長江真和（可見市）、佐藤重聖・金宇大（滋賀県立大学）

指導組織

美濃金山城跡整備委員

中井 均 滋賀県立大学 高瀬要一 琴ノ浦温山荘園（～令和5年4月10日）

溝口正人 名古屋市立大学大学院 川合康司 日本地質学会

福島克彦 大山崎町歴史資料館 山村重希 京都大学大学院

小野健吉 大阪観光大学（令和5年6月1日～） 丹波隆政 可見市山城連絡協議会

鍵谷光長 兼山地区センター長（令和4年度） 山口好成 兼山地区センター長（令和5年度）

オブザーバー 文化庁、岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課

3. 調査参加者及び整理作業者は下記のとおりである。
青木亮太、荒川菜々子、市川大翔、大八木智華、加藤凜、草野莉青、栗山葉路、幸田朱加、小林風雅、田中美沙希、高野航太郎、立石廉、仲村心海、中村優月、西村空、平内美有、古川翔大、保谷里歩、堀絢音、前田詩帆、村井良夏、森美聡、山田梨紗子、柚木重敬、吉田実華、米山さくら（以上滋賀県立大学学生）工藤雅子、小鷹夏子、後藤美都子、柴田由美、高橋涼子、増田耕作、水野耕治（以上可見市）
4. 本書は分担して執筆し、執筆者は目次に記した。編集は長江、佐藤が行った。
5. 自然科学分析については、プラント・オパール分析を株式会社バレー・ラボに、小柄の分析を公益財団法人元興寺文化財研究所に委託した。なお、主部SK02出土磁器の石材については、小早川隆氏（多賀町立博物館）のご教示をいただいた。
6. 執筆にあたって遺物の分類、年代については下記を参照した。
愛知県史編さん委員会編 2007 『愛知県市』別編窯業2 中世・近世瀬戸系
井川祥子 2006 『美濃中世後期土師器皿の分類と編年』『守護所と戦国城下町』高志書院
日本中世土器研究会編 2021 『新版 概説中世の土器・陶磁器』真陽社
7. 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2006 『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
8. 調査ならびに報告書作成の過程で下記の方々にご多大なるご指導とご協力を賜った。
伊藤航貴、伊東涼太、遠藤あゆむ、小野木学、小野友記子、荻谷菜々子、河本愛輝、木下孔暉、谷徳彦、小早川隆、小林新平、佐藤佑樹、柴田慎平、松井一明、松原草太、三好清起、村上慶介、村田秀香、森田遥、美濃金山城おもろいたい、森久子、山口繁生（五十音順・敬称略）
9. 本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可見市歴史資産課で保管している。

目 次

例言

第1章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境（金宇大）	1
第2節 歴史的環境（大八木智華）	2

第2章 既往の調査について（大八木）

第3章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯（長江真和）	7
第2節 調査の経過（佐藤亜聖）	9
第3節 関連イベントの開催（佐藤）	11

第4章 調査の成果

第1節 調査区の設定（佐藤）	12
第2節 主郭の調査	
(1) 基本層序と遺構面（佐藤）	12
(2) 検出遺構（佐藤、高野航太郎、立石廉）	15
(3) 出土遺物（草野莉青、小林風雅、田中美沙希）	17
第3節 東Ⅰ（東腰曲輪）の調査	
(1) 調査区の設定（佐藤）	22
(2) 検出遺構（荒川菜々子、市川大翔、西村空）	22
(3) 出土遺物（佐藤、草野、柚木重敏、吉田実華、米山さくら）	26
第4節 米蔵跡の調査（山田梨紗子、保谷里歩）	
(1) 基本層序と検出遺構	30
(2) 出土遺物	30
第5節 西Ⅰ（三の丸）の調査（長江）	
(1) 基本層序と検出遺構	32
(2) 出土遺物	33
第6節 表面採集遺物について（栗山葉路、堀絢音）	34

第5章 自然科学分析

第1節 美濃金山城跡のプラント・オパール分析（株式会社パレオ・ラボ）	35
第2節 美濃金山城跡出土小柄の自然科学分析（公益財団法人興寺文化財研究所）	37

第6章 まとめ（佐藤、金、長江）

第1節 主郭及び東Ⅰの造成について	41
第2節 主郭入り口構造の推定	42
第3節 自然科学分析との関係	43

附編1 美濃金山城跡における破城の実態（幸田朱加）

	45
--	----

表目次

第1表 美濃金山城跡略年表 2	第2表 分析試料一覧 35
第3表 試料1g当りのプラント・オパール個数 35	第4表 各城跡の石垣の破城の様子 47
第5表 織豊期城郭の入り口における諸施設一覧 56	

図版目次

第1図 市内関連遺跡分布図 1	第29図 m-m' 土層図 24
第2図 美濃金山城跡全体図 1	第30図 l-l'-4調査区平面図 25
第3図 美濃金山城跡曲輪平面図 4	第31図 n-n' 土層図 26
第4図 主郭調査区位置図 6	第32図 o-o' 土層図 26
第5図 美濃金山城跡曲輪配置図及び調査位置図 8	第33図 東Ⅰ11-1調査区出土遺物 27
第6図 第10次調査現地説明会風景 10	第34図 東Ⅰ11-2~4調査区出土遺物 28
第7図 第11次調査現地説明会風景 10	第35図 米蔵跡調査区位置図 30
第8図 山城に行こう！2022開催風景 11	第36図 米蔵跡トレンチ平面図 31
第9図 山城に行こう！2023開催風景 11	第37図 p-p' 土層図 31
第10図 主郭調査区平面図 13	第38図 q-q' 土層図 31
第11図 a-a' 土層図 13	第39図 米蔵跡出土遺物 31
第12図 c-c' 土層図 13	第40図 西Ⅱ調査区位置図 32
第13図 b-b' 土層図 14	第41図 西Ⅱ欄設置部分トレンチ平面図・土層図 32
第14図 d-d' 土層図 14	第42図 西Ⅱ出土遺物 33
第15図 e-e' 土層図 14	第43図 各所表採遺物 34
第16図 SK02平面図、f-f' 土層図 14	第44図 植物珪酸体写真図版 36
第17図 g-g' 土層図 14	第45図 植物珪酸体分布図 36
第18図 h-h' 土層図 14	第46図 出土した小柄の分析箇所 38
第19図 主郭表土及び掘乱出土遺物 18	第47図 小柄分析箇所詳細 38
第20図 主郭確認トレンチ最下層出土遺物 19	第48図 蛍光X線スペクトル 39
第21図 主郭SK02出土礫器1 20	第49図 蛍光X線スペクトル、X線透過画像 40
第22図 主郭SK02出土礫器2 21	第50図 美濃金山城跡主郭及び東Ⅰ変遷模式図 44
第23図 東Ⅰ調査区位置図 22	第51図 美濃金山城跡内の破城を受けた石垣と落石箇所 46
第24図 東Ⅰ西側調査区平面図 23	第52図 小谷城跡石垣写真 46
第25図 h-h' 土層図 24	第53図 美濃金山城跡石垣写真 46
第26図 j-j' 土層図 24	第54図 各城跡の主郭入り口施設(1) 54
第27図 k-k' 土層図 24	第55図 各城跡の主郭入り口施設(2) 55
第28図 l-l' 土層図 24	第56図 各城跡の主郭入り口施設(3) 56

第1章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

美濃金山城跡は、木曾川中流域の左岸、岐阜県可児市兼山地内の古城山一帯に所在する。標高約276mの古城山は、東に坊主山、西に高根山と連なり、北側の山麓には木曾川が形成した兼山段丘と呼ばれる低位河岸段丘が広がる。兼山段丘は、木曾川の堆積物をほとんどもたず、砂岩や粘板岩、チャートからなる硬い基盤岩石が露出した、土壌層の薄い岩石段丘である。本遺跡が所在する古城山では、同岩盤が随所に露頭する。古城山の北を流れる木曾川は、上流の木曾地域から尾張地域を通じて伊勢湾に注ぎ、古くから水運が発達した河川交通の動脈である。兼山段丘上に広がる兼山地区には、城下町（金山城下町遺跡）が東西带状に展開し、木曾川舟運の拠点の一つである兼山湊が営まれた。一方で、古城山の南側では、東山道、近世中山道が東西に通る。そのため、金山城下の兼山地区は軍事的・経済的に重要な交通・流通の要衝として発展を遂げた。



第1図 市内関連遺跡分布図



第2図 美濃金山城跡全体図

第2節 歴史的環境

その歴史的重要性に比して、美濃金山城に関する一次史料は少ない。その築城や変遷については、享保14年(1729)成立の大通寺蔵『金山記全集大成』(『兼山町史』所収)、近世初期成立の『兼山記』(『続群書類従』21下,合戦部 所収)に多くを負っている。金山城および城下の変遷については『金山城跡発掘調査報告書』(可児市教育委員会2013)に詳述されているため、ここでは概略を述べる。

『金山記全集大成』をもとにした兼山町史の記述(兼山町史編さん委員会1972)によると、美濃金山城は斉藤正義が、養父である斉藤道三の強大な勢力を背景として勢力を拡大した事に伴い、天文6年(1537)に東美濃における戦略拠点として、当初は烏峰城という名称で築かれた。その後、東美濃における斉藤正義の勢力拡大を脅威と感じた久々利城城主、土岐三河守によって天文17年(1548)に正義は謀殺され、美濃金山城は落城し、土岐十郎左衛門が留守代となった。

永禄8年(1565)、織田信長の東美濃攻略に際し、土岐三河守は美濃金山城を修復して織田信長に引き渡すと、信長はこれを桶狭間の戦いなどで大きな戦功があった森可成に与えた。可成はこの際、名称を烏峰城から金山城とし、この後、森家が3代に渡って美濃金山城を保持していくこととなる。

元亀元年(1570)、近江宇佐山にて可成が戦死すると息子の森長可が、天正12年(1584)に森長可が長久手の戦いに戦死するとその弟である森忠政が美濃金山城主を継いだ。

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いを目前として大名が東西陣営に別れる中、忠政は東側陣営に属し、上田城の真田昌幸に備えるべく、信州川中島海津城に転封となった。このため、美濃金山城は犬山城主石川光吉によって所有されることとなる。関ヶ原の戦い前後に美濃金山城の天守等は犬山城に移築(「金山越」)したと言われ、犬山城の解体修理工事が行われるまで「金山越」は定説とされていた(兼山町史編さん委員会1972)。しかし、昭和40年(1965)に行われた犬山城天守の解体修理工事に伴う報告書では、(1)柱・貫などの番付が1種類しかない。(2)檼・桁に旧釘穴とみられる箇所が1箇所しかない。(3)組み手・仕口、柄に解体した形跡、痕跡が見られない。(4)貫などのような同寸法の部材に解体組み直しの際見られる入り混じりがない。(5)移建の際に取り替えられた新材が見当たらないという所見から、現在地において新築されたものとし、これらの理由から「金山越」を否定している(国宝犬山城天守修理委員会1965)。しかし、「金山越」については、肯定的な意見もあり、現在も議論が行われている。

第1表 美濃金山城跡略年表

天文6年	1537	斉藤正義が烏峰城(金山城)を築城
天文17年	1548	正義が謀殺され、金山城が落城。土岐十郎左衛門が留守代となる。
永禄8年	1565	森可成が城主となる。
元亀元年	1570	森可成、近江宇佐山にて戦死。森長可が城主となる。
天正12年	1584	森長可、長久手の戦いに戦死。森忠政が城主となる。
天正17年	1589	森忠政、豊臣姓と桐紋の使用が許可される。
慶長5年	1600	森忠政が信州川中島海津城に転封となり、犬山城主石川光吉が所有することとなる。

第2章 既往の調査について

美濃金山城跡は昭和10年代、昭和40年代の調査と、平成18～22年度に行われた第1～5次の組織的調査を経て、平成25年度に国の史跡に指定された。その後、平成29～令和元年度にかけて整備に向けた調査が計画され、未発掘部分を中心とした第6～9次調査が行われている。以下、指定後（第6次以降）の調査を主として、各調査の概略を整理する。

昭和10年代の調査（可児市教育委員会2013）

美濃金山城における最初の調査である。調査の経緯は不明であるが、この調査では美濃金山城の主な遺構の実測調査が行われた。主郭部分は実測図に「天守台」として記載されると同時に、建築物構造の推定も行われ、犬山城への移築が行われたと結論付けている。

昭和30・40年代の調査（可児市教育委員会2013）

昭和38年に兼山町（現可児市）の史跡に指定されたことを契機とした調査である。兼山町文化財委員会、兼山町教育委員会、兼山町誌編集委員会が中心となって発掘調査を行ったとされ、昭和41年（1966）に主郭礎石を確認、古瓦の破片、鋸、鋤通、角釘、一厘銭などが出土した（大類伸1966）。

昭和42年（1967）の発掘調査では天守において門、石段、建物の礎石を発見し、この調査結果から「金山城跡本丸趾推定平面図」が作成され、烏竜神社の本殿・拝殿部分を「天守」、平坦面の中央で礎石が明確になったところを「本丸御殿」、それらに付随する「袖櫓」や「穴蔵」などが明記されたほか、各曲輪の命名が行われ、これが現在の一般的な呼称となっている。

第1次調査（可児市教育委員会2013）

第1次調査は平成18年度（2006）に主郭部分の建物跡の範囲確認や、付随する石垣などの保存状況の確認を目的に行われた。なお、この調査以降、調査字数が付与されるようになった。主郭地表面に確認できる礎石を基準に4本、北側の石垣屈折部分に1本のトレンチを設定した。また、主郭の四方向の石垣は堆積土砂の撤去を一部行い、測量と保存状況の確認を行った。

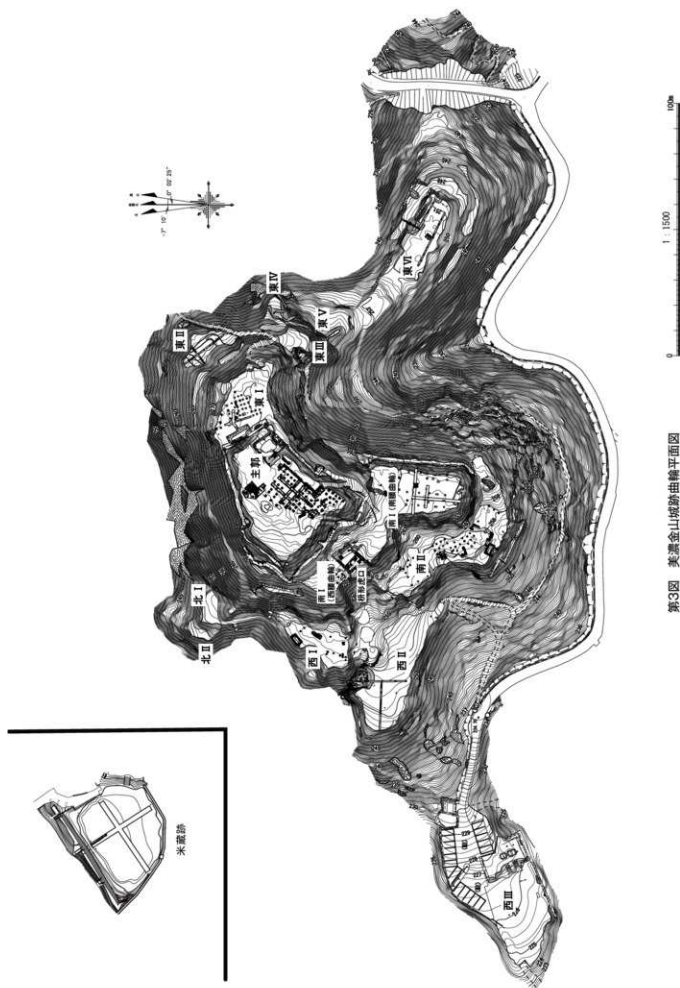
第2次調査（可児市教育委員会2013）

第2次調査は平成19年（2007）に主郭部分を取り囲む東Ⅰ（東腰曲輪）、南Ⅰ（南腰曲輪）、南Ⅱ（西腰曲輪）、枳形虎口の調査を行い、各平坦面の遺構・礎石を確認する事を目的とした。各曲輪の石垣は堆積土の除去を行い、測量を行った。

東Ⅰ（東腰曲輪）は、3本のトレンチを設定し、一部深掘りを行い礎石の確認を行った。また、「井戸跡」と伝承のある枳形遺構の外側にトレンチをあげた。

南Ⅱ（南腰曲輪）は、平坦面に3本のトレンチを設定し、一部深掘りを行い、礎石の確認を行った。また、東Ⅲ（東部曲輪南）への虎口部分とされる部分に4本のトレンチを設定した。

南Ⅱ（西腰曲輪）は、2本のトレンチを設定し、一部深掘りを行い各礎石の確認を行った。枳形虎口は現存する礎石を中心にトレンチを設定し、門の礎石の確認を行った。



第3圖 美濃金山城跡曲輪平面圖

第3次調査（可児市教育委員会 2013）

第3次調査では平成20年(2008)に南Ⅱ(二の丸)、西Ⅰ(三の丸北曲輪)の調査を行い、礎石の分布範囲の確認を行った他、後世に設置されたバンガロー跡などの確認、撤去などが行われた。南Ⅱの石垣は堆積土の除去を行い、測量を行った。

第4次調査（可児市教育委員会 2013）

第4次調査は平成21年(2009)に、城跡の範囲確認を目的に米蔵跡の調査が行われた。米蔵跡の北側三面に築かれた石垣付近の堆積土の除去を行い、測量を行った。

第5次調査（可児市教育委員会 2013）

第5次調査は平成22年(2010)に東Ⅱ(東部曲輪)、東Ⅲ(東部曲輪南)、東Ⅳ(東部曲輪南東)、東Ⅵ(左近屋敷)、西Ⅱ(三の丸)の調査が行われた。東Ⅵ、西Ⅱ、西Ⅲ(出丸)の石垣は堆積土の除去を行い、測量を行った。

第6次調査（可児市教育委員会・滋賀県立大学 2019）

第6次調査は平成29年度(2017)の烏竜神社撤去に伴い、天守があったと想定される地点に「Ⅰ区」、その北西部に「Ⅱ区」を設け、天守の有無や規模、構造の解明を目的として調査を行った。

Ⅰ区の調査では、石垣が検出され、瓦が出土したことにより建築物は半地下構造の瓦葺建物であり、土層の状態から3時期に変遷していることが確認された。しかし、礎石や柱穴等は検出されなかったため建物構造の把握はできなかった。

Ⅱ区の調査では調査区北側と南側で石敷遺構が確認された。調査区南側の遺構より西側では自然岩盤の上に整地を行ったうえで礎石を据えていることが確認できたほか、遺構面の比高差から2時期の変遷があることが想定されている。

第7次調査（可児市教育委員会・滋賀県立大学 2019）

第7次調査は平成30年度(2018)に行われ、Ⅰ区の追加調査のほか、新たに主郭虎口部分に「Ⅲ区」、主郭の西側の凹み部分に「Ⅳ区」が設定された。

Ⅰ区の調査では、東側の石垣列の続きが検出されたが、北側では石垣が検出されなかった。

Ⅲ区の調査では、全体を掘り下げると岩盤部分と整地層、礎石が検出され、整地層の下からも礎石が検出されたことから、虎口部分は2時期の変遷があることが確認された。虎口を形成する東側石垣は上層整地層形成時に据えられており、内枳形虎口の形成は築造当初より一段階遅れることが判明した。また、南側の石段で残存しているものは一部であり、後世の積み直しであることが再確認された。

Ⅳ区の調査では、窪んでいる地形や石組が存在したことから、主郭のもう一つの虎口があるのではないかと推定されていたが、後世の擾乱が入り造成も弱いことから虎口ではないことが判明した。

第8次調査（可児市 2021）

第8次調査は令和元年度(2019)に行われ、南Ⅱから枳形虎口への石段部分、Ⅰ区の追加調査、北西の未調査部分に「Ⅴ区」が設定され調査が行われた。

石段部分の調査は石段を補修するための事前調査であり、現状確認できる石段は美濃金山城当時

のものではなく、後世に積み直されたものであることが明らかとなった。

I 区の追加調査は、礎石などの建物構造の検出を目的に行われ、旧調査区の南側を掘削したが、調査部分において礎石や柱穴は検出されなかった。

V 区の調査では、地表面から約 70cm 下で被熱遺構が確認されたほか、この遺構を埋めた整地層が確認された。また、主郭の北側は近現代に土が盛られ、造成されていたことが明らかとなった。V 区の南側である主郭中央部分においては、礫敷遺構が確認された他、礎石の上に小さな礫を混ぜた盛土を行っていることが確認され、V 区では 2 時期の変遷があることが判明した。

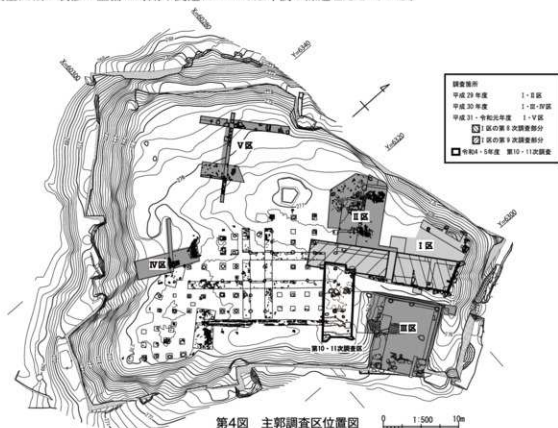
第 9 次調査（児見市 2021）

第 9 次調査は令和元年度（2019）に行われ、第 8 次調査の I 区で検出されなかった礎石の検出、V 区の礫敷遺構の拡張を目的とし、I 区は西側の御殿との間部分へ調査区を拡張し行われた。

I 区の調査では、川原石礎石の下からチャートの礎石が検出されたことから I 区西側では 2 時期の変遷があることが確認された。また、御殿部分には礎石があるものの、天守想定部分では礎石・柱穴が存在しないことが再確認された。

V 区の調査では、礫敷遺構は部分的であることが確認された。

第 6～9 次の発掘調査から、主郭及び天守想定部分の変遷は石垣や瓦を用いない城があった前期、石垣や瓦を使用する建造物があった中期、破城が行われた後期と 3 時期の変遷が明らかとなった。また、中期段階の層位から桐紋の軒平瓦やコビキ B の丸瓦が出土していることから、忠政が桐紋の使用を許可された天正 17 年（1589）以降に改築が行われた可能性が考えられる。一方で、『兼山町史』では長可の戦歴において天正 4～5 年（1576～1577）が空白となっていること、天正 5 年（1577）に城下町整備に着手し自ら魚屋町名を与え、定期市を開くなどを行っていることから、城下町と同時に美濃金山城も再整備されたのではないかとしている（兼山町史編纂委員会 1972）。美濃金山城の改修・整備の時期や変遷については今後の課題となっている。



第3章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

美濃金山城跡は、第2章に記述したようにこれまで9以上にわたる発掘調査が行われ、その成果は報告書として刊行されている。主郭についても複数回調査を行っているが、主郭調査の課題として虎口から御殿部分へとあがる平坦面部分の構造が不明であることから、令和4・5年度に追加調査を行うこととなった。

また、東Ⅰ（東腰曲輪）は主郭と同様に今後の整備の設計のための調査、米蔵跡及び西Ⅱ（三の丸）は城跡の安全対策整備のための調査を実施した（第5図）。

（1）令和4年度（第10次調査）

主郭

前述したように、虎口から主郭の平坦面へとあがる部分の構造を調べるための調査を実施した。調査の結果、過去の調査で検出された2時期の遺構面が確認され、第1遺構面で2つの礎石を検出した。これらの礎石は門や御殿の一部の可能性が考えられる。また、下層の第2遺構面では、礎石間の距離が御殿と同じである礎石が検出された。

東Ⅰ（東腰曲輪）

東Ⅰでは、平成19年度の調査により平坦面に川原石の礎石があることや、主郭東面石垣に接する井戸跡という伝承が残る石拵遺構の構築土に礎石や瓦を含んでいることが明らかとなっているが、平成19年度当時の調査状況が明確ではなかったため、3箇所のトレンチを設定し、石拵遺構の構造把握を行った。

調査の結果、現在地表面にみられる樹状の石組みは、平成19年度調査以降に積みなおされたものであることが明らかになった（以前の記録なし）。ただし、その下層には織豊期の瓦を含む整地土と石組みが存在し、現状規模に類似する石組遺構が存在することが確認できた。

米蔵跡

令和3年度に米蔵跡西面の石垣が崩壊し、その修理のための情報を得る必要性が生じた。また、米蔵跡西面は一部石積みが残っているが、米蔵跡北面の石垣と積み方が異なっているため、後世に築かれた可能性が考えられる。米蔵跡西面にトレンチを1箇所を設定し、裏込め等の状況を確認する調査を実施した。

調査の結果、現地表面下1.0m以上に至るまで攪乱を受けており、下層で検出した造成土は江戸時代以降のものであることが判明し、石積みは現代に積まれたもの（隣接する排水路造成時か）であることが明らかとなった。

（2）令和5年度（第11次調査）

主郭

主郭入口の状況を明らかにするために、令和4年度の調査区の拡張を行った。

調査の結果、主郭入口の構造は、令和4年度に想定したような薬医門など独立した施設ではなく、御殿が延長していることが想定された。

東Ⅰ（東腰曲輪）

石組遺構と石垣の関係を明らかにすることを目的に、東Ⅲから東Ⅰへと上がる入り口の構造を明

らかにすることを目的にそれぞれ2箇所のトレンチを設定し、調査を行った。

調査の結果、石橋遺構は2面の整地層が確認された。下層の整地層に桐紋軒平瓦が伴うことから、忠政期において天守の創建もしくは改修があり、それに伴い石橋遺構が構築もしくは修築されたと考えられる。

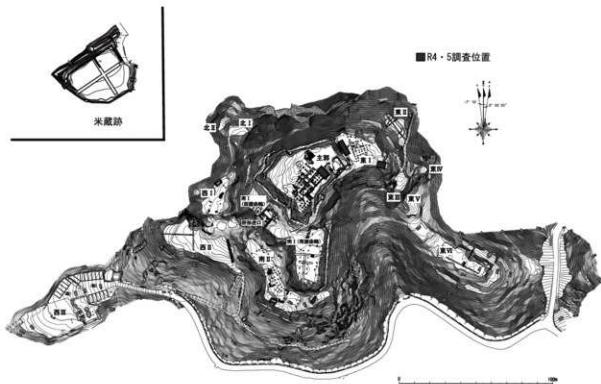
東Ⅲから続く東側の入口部分では瓦を伴う整地層の下に川原石の礎石が確認され、2時期あることが明らかとなった。礎石によりこの場所には、南側の平虎口を有する東Ⅲの監視を行う施設があったと考えられるが、規模等については令和6年度の調査課題となった。

西Ⅱ（三の丸）

西Ⅱは、米蔵跡から山頂の曲輪への登城路が想定される場所であり、虎口が築かれる。また、北面、東面、南面の三方向に石垣が築かれ、平坦面には建物礎石がみられる曲輪である。東側の1段高い部分には南Ⅱ（二の丸）が築かれ、南Ⅱの西面には石垣が築かれている。

この石垣は出丸駐車場から主郭方面へと登城していく際に、初めにみられる大規模な石垣であるため、近づいて写真撮影を行う人もみられる。ただ、破城を受けて天端や角石が落とされているほか、一部重箱積みになっており、実施した石垣カルテにより危険度が高いと判断された。そのため、石垣にある程度の距離までしか近づけないようにするための侵入防止柵を設置することとし、その設置場所の堆積状況や重要な遺構がないか、確認することとした。

調査の結果、地山面までは概ね30cmの堆積があり、堆積土の中から瀬戸美濃産陶器や瓦などが出土した。設置場所には礎石や土坑などの遺構はなく、掘削深度30cm以内で、侵入防止柵を設置することとした。



第5図 美濃金山城跡曲輪配置図及び調査位置図

第2節 調査の経過（日誌抄）

第10次調査（令和4年度）

8月29日（月）資材搬入、調査区の設定を行う。

8月30日（火）各調査区表土掘削開始。

8月31日（水）主郭調査区は表土直下2～3cmで黄褐色の硬化面を検出したが、埋土内にガラス等を含むことから、かなり新しい年代の土層と推定する。

東Ⅰの石組みはどこまで掘削しても現代の遺物を含んでおり、かなり改変を受けた可能性が推定される。

米蔵跡調査区では現状地表面に観察される石組が、現代遺物を含む土層よりも新しいことを確認した。

（株）文化財サービスによるGPS測量を行う。米蔵跡、主郭それぞれに2点ずつ座標および水準点をプラ杭にて設置する。

9月1日（木）主郭調査区は表土及び包含層の掘削を行う。予想以上に樹木根の攪乱が多い。東Ⅰ調査区の石組み石材直下から土嚢袋が出土し、現況の石組みが近年に組み上げられたものであることが確実となった。同時に石組み下層から整地を伴う石組みが確認され、現況の石組が古いものを踏襲して構築されている可能性が高まる。降雨のため午後の作業中止。

9月2日（金）主郭調査区第1遺構面全景写真撮影。東Ⅰ各調査区の石列下堆積層が当初のものか検証作業を行う。

米蔵跡調査区は盛土最下層から近世以降の常滑焼土管が出土。こちらも現状景観の成立時期が近世以降であることが確定的になった。

9月3日（土）主郭調査区第1遺構面の遺構を掘削したところ、すべての遺構からガラスが出土し、遺構面そのものが新しい可能性が想定される。

米蔵跡調査区では掘削した部分の大半がU字溝の掘り方であった可能性が浮上し、検証作業を継続する。

9月4日（日）主郭調査区では第1遺構面のベース土が神社造成時の盛土であることが判明し、積極的に掘削することとなった。

東Ⅰ全体に3.0mメッシュを設置し、石組み現況の1/20実測図を作成する。

9月5日（月）史跡美濃金山城跡整備委員会の現地視察。

9月6日（火）主郭調査区は第2遺構面の検出作業を行うのと並行して、階段部分に礎石検出を目的とした拡張を行うが、礎石は検出できなかった。

米蔵跡調査区遺構平面図の作成。

9月7日（水）主郭調査区第2遺構面検出状況写真撮影、遺構掘削を行う。米蔵跡調査区は確認された盛土の下層確認を行う。

9月8日（木）主郭調査区第2遺構面平面図作成。また、主郭ではトータルステーションにて現況礎石の再測量を実施。配置図に若干狂いがある可能性を指摘したが、確定に至らなかった。降雨のため午後の作業中止。

9月9日（金）主郭調査区完掘状況写真撮影、全体平面図作成。東Ⅰ石組み現況図面完成。米蔵跡調査区埋め戻し完了。

9月10日（土）地元向け現地説明会を開催し、約30名の参加を得た。（第6図）

9月11日（日）埋め戻し、原状復帰ののち資材撤収。現地調査を終了する。

第11次調査（令和5年度）

9月4日（月）資材搬入、準備工。

9月5日（火）設営、調査区設定、表土掘削開始。

9月6日（水）～8日（金）集中講義のため作業中止。

9月9日（土）主郭調査区表土掘削。表土の堆積薄く、すぐに整地層に達するが、新たな礎石を検出。SD20を検出。埋土内から近代以降の遺物が出土するが、埋土の観察からは全てが近代以降の埋土ではなさそうである。

東Ⅰ調査区は昨年度同様、表土除去後土嚢袋が出土し、かなりの攪乱が予想される。

9月10日（日）主郭調査区遺構検出状況写真撮影、遺構掘削開始。東Ⅰ第1調査区にて、下層より整地層検出。昨年検出の整地層に比して瓦が少ない。

9月11日（月）主郭調査区遺構配置略図作成、遺構掘削。東Ⅰ調査区表土掘削、整地層検出作業継続。

9月12日（火）主郭調査区北端で集石遺構を検出した。ただし近現代の土層に帰属すると思われる。東Ⅰ各調査区完掘状況写真撮影及び表土直下の遺構について写真撮影を行う。東Ⅰ第4調査区表土から小柄出土。

9月13日（水）主郭遺構掘削、1/20 全体平面図作成、史跡美濃金山城跡整備委員会の現地視察

9月14日（木）主郭・東Ⅰ 1/20 全体平面図作成、東Ⅰ調査区表土直下で検出した各種遺構の掘削、写真撮影。東Ⅰ各調査区写真撮影。

9月15日（金）主郭全体掃除、完掘状況写真撮影。東Ⅰ各調査区平面、土層断面図作成、埋め戻し。東Ⅰ第4調査区の下層確認を行ったところ、整地層直下から礎石出土、東Ⅰも全面的に2時期あることが確実となった。

9月16日（土）地元向け現地説明会を開催し、約25名の参加を得た（第7図）。現地説明会後埋め戻し作業。東Ⅰ第1調査区にて整地層内から桐文軒平瓦が出土する。

9月17日（日）埋め戻し、原状復帰ののち資材撤収。現地調査を終了する。



第6図 第10次調査現地説明会風景



第7図 第11次調査現地説明会風景

第3節 関連イベントの開催

第10次、11次調査共に調査終了時に地元向け現地説明会を開催したが、それ以外に可児市と滋賀県立大学考古学研究室が共同で「山城に行こう！2022」、「山城に行こう！2023」（主催：可児市／可児市山城連絡協議会）にてブース出展を行った。出展内容は以下のとおりである。

山城に行こう！2022（第8図）

日 時：2022年11月19日・20日（土・日）

内 容：美濃金山城主郭会場にて発掘調査の説明、体験イベント（オリジナル御城印を作ろう、拓本体験）、美濃金山城跡第10次調査の動画配信。

山城に行こう！2023（第9図）

日 時：2023年11月11日（土）

内 容：可児市広見地区センター会場にて体験イベント（遺物展示、オリジナル御城印を作ろう、武将の手紙を書いてみよう）、美濃金山城跡第11次調査の動画放映。



第8図 山城に行こう！2022開催風景



第9図 山城に行こう！2023開催風景

第4章 調査の成果

第1節 調査区の設定(第4図、第23図、第35図)

第10次・第11次調査の目的は、①主郭入り口階段上部と推定御殿部分の取り付きについての情報を得ること、②東Ⅰにみられる石組みの年代推定及び東Ⅰ入り口の構造についての情報を得ること、③豪雨により被災した米蔵跡隅部を復旧するための基礎情報を得ることである。この調査目的に即して、それぞれの地区に下記の調査区を設定した。

主郭は第10次調査で東西1.5m、南北2.2mの調査区を設定したが、検出した礎石の配置から独立した門構造であるのか、建物に連続する構造になるのか判断がつかねたため、第11次調査において第10次調査区を包接する形で東西2.0m、南北4.8mの調査区を設定した。

東Ⅰの現状に残されている石組は「井戸跡」の伝承を残し、第2次調査において全体を調査している。しかし、現状石組みの設置年代、裏込めの形状、主郭石垣との取り付きなどは未確定のままであったため、第10次調査で3箇所、第11次調査で2箇所の調査区を設定した。調査区の名称については第10次・第11次調査でそれぞれ第1・2調査区と命名してしまったため、報告書ではフィールドナンバーを極力生かすことを優先して、第10次調査の調査区には10を付して10-1・2・3調査区、11次調査には11-1・2調査区とそれぞれ命名した。

また、東Ⅰには北西側から取り付く進入路があり、その入口付近には大型の石材がみられる。このためこの付近における門などの閉塞施設の有無を確認するため、現在機能している登城道の両側に調査区を設置し、北側を11-3調査区、南側を11-4調査区と命名した。

米蔵跡は本来石垣があったと思われる西側の斜面地に東西約1.6m、南北約0.8mのトレンチを設定した。

第2節 主郭の調査

(1) 基本層序と遺構面

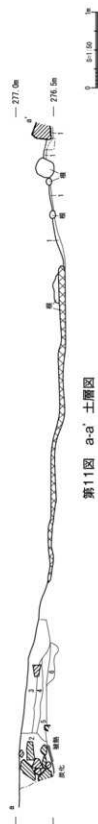
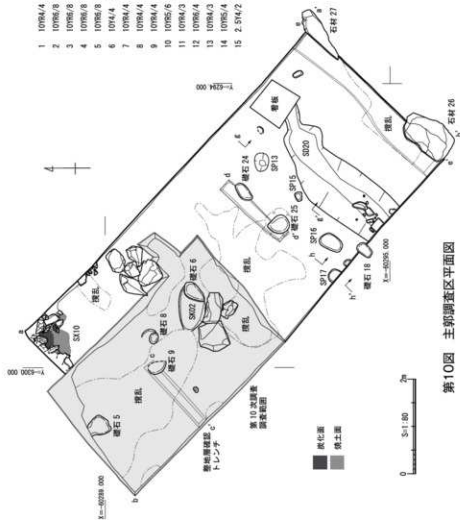
基本層序は基盤層を除いて主に四層で構成される(第11～15図)。

第1層(第11・13図-1層、第15図-24～26)は表土である。しまりの弱い暗褐色土で有機物を大量に含む。

第2層(第11図-3～6、第13図-16・17層)は近現代のガラスや瓦片を多く含み、しまりの強い明褐色で、粘性の強いブロック土を多量に含む。烏竜神社造成時の整地層と考えられる。調査前に存在した大型石材3個体はいずれも本層の上位に存在したため、遊離した石材であることが判明した。本層は3層上面に均等に敷設されているわけではなく、北西方向に行くほど層厚を増し、また下面は凹凸が著しい。今回の調査では第9次調査で確認されたSK5の延長を検出したが、この土坑は本層によって埋没する近現代の土坑であることが判明した。埋土内からガラス類、瓦類、酒瓶などが出土した。

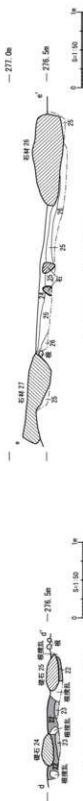
第3層(第12図-7層、第13・14図-21・22層)は明黄褐色でややしまりがある極細砂層である。混入物が少なく比較的均質な粒径構成を持ち、塊状構造が発達することから人為的な埋設土と考えられる。検出した上層礎石は本層に据えられており、また層内から縄文期と推定される遺物が出土していることから当該期の整地層と推定できる。

第4層(第12図-9～15層、第14図-23層)は黄褐色系の細砂と炭化物層の互層である。詳細は「整地層確認トレンチ」の項で後述する。下位で検出した礎石は本層に据えられることから、主





第13図 b-b' 土層図



第14図 d-d' 土層図

第15図 e-e' 土層図



第16図 SK02平面図、f-f' 土層図



第17図 g-g' 土層図



第18図 h-h' 土層図

- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂混中粒砂 (0.5mm程度の黒内層状シルトブロック・炭、煤工片を含む、近現代の埋地層)
 17 10YR4/6 褐色 細砂混中粒砂 (しまりが非常に強く、煤少量含む、近現代の埋地層)
 18 10YR2/3 暗褐色 中粒砂 (遠法のトレンチ層土)
 19 10YR4/2 灰褐色 中粒砂 (有機物多く含む、ガラス・プラスチックを含む、遠法のトレンチ層土)
 20 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂混中粒砂 (しまり強い、2000年以上)
 21 10YR4/4 褐色 中粒砂混細砂 (ブロック構造を持ち、0.2~5mmの隙を多く含む、上層埋地層)
 22 10YR5/6 暗黄褐色 中粒砂 (ややしまりあり、粘性なし、上層埋地層)
 23 10YR5/8 明黄褐色 細砂 (しまりあり、粘性なし、下層埋地層)
 24 10YR4/4 褐色 中粒砂 (有機物多量に含む、黄土)
- 中粒砂 (有機物多量に含む、煤が多く入り込む、黄土)
 細砂 (0.20~30mmの隙を含む、黄土)
 シルト (0.100mm前後の打ち込みの隙を含む、かわらけ含む)
 細砂 (しまり強い黄土)
 中粒砂 (隙を含むシルトブロック)
 暗褐色 (しまり強く、煤少量含む、砂15層土)
 中粒砂 (しまり強く、煤を含む)

郭造成時の整地層と考えられる。層内より大甕第3段階後半～第4段階のものを含む縄文期の土器・陶磁器が出土した。

調査に際しては第3層上面と第4層上面をそれぞれ遺構面と認定し、第1遺構面、第2遺構面とした。史跡地内のため調査は第1遺構面に限定し、第2遺構面については攪乱内で検出した礎石の確認に留めた。ただし、平成29・30年度Ⅰ区（天守想定部分）の調査およびⅢ区（虎口部分）の調査で主郭部分に本来かなりの高低差があり、相当量の盛土がなされていることが推定されたため、今後の整備に向け地盤強度を推定するためにも、旧地形の把握が望まれたため、礎石部分を中心に一部断ち割り調査を行った。

整地層確認トレンチで確認した層序（第12図）

調査区中央付近、第2遺構面礎石9付近において、幅25cmの確認トレンチを設定した。調査の結果、にぶい黄褐色の細砂を主とする厚さ10cm前後の土層と、炭化物を多量に含む層が互層を成して東側へ落ち込んでいく状況を確認した。最大で現地表下1.0m前後まで掘削したが、湧水がみられたため掘削を中止した。基盤層については東へ急激に落ち込むチャートの岩盤を検出した。このことから、主郭は調査区を境に東側にかかなりの盛土が行われていると考えられる。なおこの整地土について植物ケイ酸体分析を行ったところ、多量のイネ科植物ケイ酸体を検出した。詳細は第5章で述べる。

（2）検出遺構

1. 第1遺構面検出遺構（第10図）

第1・2層を除去し、第3層上面で検出した遺構面である。現地表下約20cm、標高277.6m前後に相当する。鳥竜神社造成時の攪乱および樹木根による攪乱が著しく、遺構の残存は良好でない。

礎石

可能性に留まるものも含め、7点の石材を確認した。いずれも砂岩質の川原石で、現状地表面に礎石として確認されている石材と同質のものである。なお、番号は調査時に通番で付与した遺構番号をそのまま使用しているが、第10次調査は礎石に単独で通番を付与していたため、フィールド番号とずれがある。原因など一次資料を参照される際は注意されたい。

礎石6 長軸約50cm、短軸約30cmの平滑な垂円礫で上面に柱あたり痕はみられない。第3層に据え付けられていた。平面観察及びSK02掘削時の断面観察（第16図）による限り、掘方は確認できない。重複関係からSK02に先行する遺構と考えられる。

礎石8 直径23cm前後の垂円礫で、調査区中央に穿たれた攪乱土坑へ落ち込む。斜面上方に掘方状の掘り込みが伴うが、これは攪乱土坑形成の際に礎石8が下方へずり落ちた痕跡と考えられる。したがって本来の位置は現位置より約20cm斜面上方であったと推定できる。

礎石24（第14図） 長軸約44cm、短軸約23cmの平滑な垂円礫で、上面に柱あたり痕はみられない。22層に据え付けられており、掘方などはみられない。礎石24・25の掘方を確認するため、断ち割りを行ったが礎石24に掘方は確認できなかった。

礎石25（第14図） 直径約38cmの垂円礫で、第3層に穿たれた直径約58cmの掘方状の土坑内に据え付けられる。掘方状の土坑埋土は植物根が絡む攪乱土であるが、下半は第3層に据えられており、礎石の二次的な移動の痕跡は確認できない。断ち割りの結果、礎石25の周囲に掘方状にみられる黒褐色土は、礎石据え付け時の掘方ではなく、過去の調査に際して礎石周辺が掘り下げられ

た痕跡で、そこに根が入り込んだとみられる。礎石 24 との位置関係は、礎石心間 110cm、礎石上面のレベルは礎石 25 が約 4cm 高い。

石材

石材 26・27 (第 15 図) 調査区南東端に 2 基のチャート岩礫が存在した。主郭施設に伴うものであるかどうかが課題となっていたため、調査区に取り込み、据え付け状況を確認した。いずれも基盤岩を構成するチャートであり、石材 26 は長軸約 125cm、短軸約 70cm、石材 27 は長軸約 120cm、短軸約 40cm を測る歪角礫である。主郭整地土である第 3 層に据えられているかどうかを判断するために東壁面付近に断ち割りを設定したところ、表土が石材下面まで達していることが判明したため、近年に現在の位置へ移動させられたものであることが明らかとなった。

土坑

SK02 (第 16 図) 長軸約 100cm、短軸約 55cm、深さ約 20cm を測り、長楕円形を呈する。礎石 6 との重複関係は、平面観察では礎石 6 に破壊されるようにみえるが、礎石 6 の形状に合わせて掘削されており、礎石 6 に後出する遺構と考えられる。埋土は小礫が多く、直径 5～15cm 前後の円礫が多数出土したが、その多くが一部を打ち欠かれたものであった (第 21・22 図)。円礫の配置に規則性は確認できない。

ピット

SP13 (第 17 図) 調査区中央付近で検出したピットである。南北約 30cm、深さ 7cm 前後を測り、断面形態は浅い皿形を呈する。埋土はしまりの強い細砂で、人為的な埋土である。礎石 24 との位置関係は心間距離約 66cm を測る。形状と礎石との位置関係から、礎石抜き取り痕と考えられる。

SP15 (第 17 図) 調査区中央付近で検出したピットである。南北約 15cm、深さ 4cm 前後を測り、断面形態は浅い皿形を呈する。埋土はしまりの強い細砂で、人為的な埋土である。礎石 25 との位置関係は心間距離約 66cm を測る。形状と礎石との位置関係から、礎石抜き取り痕の可能性もあるが、規模が著しく小さいことから断定できない。

SP16 (第 10 図) 調査区南西付近で検出したピットである。南北約 36cm、深さ 1.5cm 前後を測り、断面形態はかなり浅い皿形を呈する。埋土はしまりのある細砂で、人為的な埋土である。

SP17 (第 18 図) 調査区西端中央付近で検出したピットである。南北約 30cm、深さ 3cm 前後を測り、断面形態は浅い皿形を呈する。埋土はしまりのある細砂で、人為的な埋土である。礎石 25 との位置関係は心間距離約 170cm を測る。形状と礎石との位置関係から、礎石抜き取り痕と考えられる。

溝

SD20 (第 10・13 図) 調査区東寄りで検出した。最大幅 113cm、深さ約 20cm を測り、断面形態は溝中央部が一段深くなる皿形を呈する。埋土はいずれにもぶい黄褐色の細砂であるが、下層はやや色調が異なる。葉理構造などはみられず、流水痕跡は確認できない。調査区中央付近から幅を減じ、緩やかに南方向へ屈曲するが、調査区東端は看板によって破壊される。調査区西端付近には石材の集中が確認でき、中には石造物残欠と思われるものもみられる。埋土内上下層いずれからもガラスやプラスチック片が出土したが、これは過去の調査による埋戻し土の中からの出土と考えられ、オリジナルの埋土から遺物の出土はみられない。位置関係は 2013 年度報告 SD01 の延長に相当す

ると考えられる。2013 年度調査ではこの溝から大窯第 4 段階前半の摺鉢が出土しており、御殿雨落ち溝と評価している。今回の調査では埋土内から原位置をとどめない石材が多数出土したが、これらは本来存在した石組み小溝を破壊して石材を抜き取った痕跡と評価できよう。

その他遺構

SX10 (第 10 図) 調査区北端部で検出した遺構である。チャート角礫が集中しており、遺構下面は被熱する。埋土は礫によって構成され、そのサイズで大きく二層に分かれる。上層は直径約 30cm の角礫、下層はその 2/3 程度の角礫で構成される。第 9 次調査 9 トレンチ中央南側で検出した現代の攪乱に伴う礫群と同一のものと考えられ、角礫の一部にはコンクリートが付着したものがある。第 9 次調査ではこれらの礫を昭和期に立てられた看板の基礎に関連するものと考えているが¹⁾、今回の調査成果もこれを否定するものではない。

礫には被熱痕は確認できないが、礫群の下の整地土上面は著しく被熱しており、炭化物を含む焼土が伴う。今回の調査では被熱は約 75cm 四方の範囲に広がっていることを確認したが、北から北西方向にかけて調査区外にも拡大していると予想される。これらのことから礫群と被熱痕は別遺構で、被熱痕は城郭に関連する遺構である可能性があることを指摘しておきたい。

2. 第 2 遺構面の遺構

調査区中央部の攪乱土坑内で礎石 5・9 の 2 個体の礎石を検出した。このうち礎石 5 は第 9 次調査 SK5 内で検出した礎石と同じ個体である。いずれも攪乱形成に伴い若干移動しているが、ほぼ原位置に近い位置関係にあると思われ、第 4 層に掘え付けられていた痕跡が確認できる。礎石中心間の距離は 175cm を測り、上面の標高もほぼ同じである。第 1 遺構面礎石 6 上面との比高差は約 20cm を測る。

(3) 出土遺物

1. 主郭表土及び攪乱出土遺物・表探遺物 (第 19 図)

表土及び攪乱から出土した遺物と表探遺物のうち、主要なものについて図化、報告を行う。特に断りのない限り主郭出土・採集遺物であるが、一部主郭以外の場所での表探遺物も併せて報告する。

1～3 はかわかけ (土師器皿) である。1 は口縁部から体部の破片である。体部は直線的であり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部上面には幅 7mm 前後の面を持つ。器厚が 7mm 前後と厚く、大型のかわかけと考えられる。表面劣化のため調整等は不明であるが、雲母を含む淡褐色の精良な胎土で、他のかわかけとはやや胎土が異なる。2 は直線的な体部を持つ口縁部の破片である。端部から 17mm 前後の比較的広い範囲を強くナデ調整し、下半にはユビオサエの痕跡を有する。1・2 はロクロの使用については判断材料に欠ける。3 はロクロ成形の底部片であり、底部外面を円盤高台状に成形し、回転糸切痕を残す。全体的に胎土は橙褐色を呈し、長石や赤色酸化土粒を少量含む。

4～11 は瀬戸美濃産陶器である。4 は鉄釉皿類である。回転ナデ成形で作られ、内面全面に鉄釉を施す。外面は露胎で、底部外面に回転糸切痕を残す。舗装道路から分岐する登り口付近で採集したものである。5 は大窯第 3 段階後半から第 4 段階の鉄釉天目茶碗である。釉薬は比較的薄く、胎土は緻密である。6 は大窯第 1 段階後半、7 は第 2 段階の灯明皿である。回転ナデ成形で作られ、内面には成形時の凹凸を顕著に残す。表面には淡褐色の化粧泥が筋状に付着する。東濃型山茶碗の

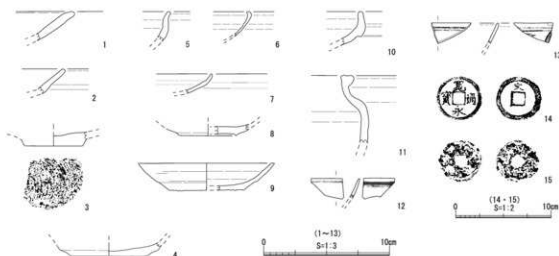
¹⁾ 美濃金山城第 9 次調査日誌よりコンクリート片の出土に関する記述が確認される。

系譜上に位置付けられるものである。8は灰釉丸皿である。回転ナデ成形で作られ、底部外面の切り離し方法は不明である。内外面に灰釉を施すが、底部外面は露胎である。9は大窯2段階後半の灯明皿である。平坦な底部とやや湾曲する体部を持ち、口縁端部は水平に面取りを行う。回転ナデ成形で作られ、底部外面には回転糸切痕を残す。東濃型山茶碗の系譜上に位置付けられるものである。

10は大窯第2段階の鎗軸揺鉢である。やや湾曲する縁部を持ち、回転ナデで成形される。破片のため掘り目の条数等は不明である。11は灰釉壺である。「大海」と呼ばれる大型の茶壺と考えられる。口縁部をT字状に肥厚させ、上面はわずかにくぼむ。肩の張りが強く、肩部以下は直線状である。内外面回転ナデで成形され、外面及び口縁部内面に灰釉を施す。軸は薄く釉垂れなどはみられない。口縁は右回転である。

12・13は輸入染付碗である。器壁は厚さ3mm前後と薄く、内外面に圈線を描く。13は外面に植物文の一部が残る。小野分群E群もしくはF群のものである。

14は寛永通宝文銭（1668年初鋳）である。銭径は最大径24.3mm、最小径23.7mmである。銭文は細字で精緻、鋳あがりは良好だが、「通」字の下部に圧痕があり、銭貨全体が外圧でゆがむ。美濃金山城跡では第6次調査で文久永宝が出土しているがいずれも近代以降に投棄されたものと考え



図版	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底・高台径 (cm)	その他	軸差	時期・分類	色図	備考
1	黄色土層 (表土)	土師器	かわらけ	—	(2.3)	—				2. SYR6/4	
2	S1 (攪乱)	土師器	かわらけ	—	(2.0)	—				SYR5/8	
3	表土	土師器	かわらけ	—	(1.1)	(5.6)				7. SYR7/6	
4	表土	瀬戸美濃	皿	—	(1.1)	(6.0)		鉄軸	大窯	7. SYR5/4	
5	S1 (攪乱)	瀬戸美濃	天目茶碗	—	(2.4)	—		鉄軸	大窯2後から4	胎土: 10YR5/3 釉面: 10YR2/1, 7. SYR3/4	
6	黄色土層	瀬戸美濃	灯明皿	—	(2.0)	—			大窯1後	2. SYR3/3	
7	黄色土層 (表土)	瀬戸美濃	灯明皿	—	(1.5)	—			大窯2	10Y7/1	
8	表土	瀬戸美濃	丸皿	—	(1.0)	(4.8)		灰釉	大窯	2. SYR/4	
9	黄色土層 (表土)	瀬戸美濃	灯明皿	(10.8)	(2.1)	(6.0)			大窯2後	SYR/1	
10	過去頭表埋土	瀬戸美濃	揺鉢	—	(2.7)	—		銅軸	大窯2	表面: 10R4/5 胎土: 2. SY7/4	
11	表層	瀬戸美濃	壺 (茶入か?)	—	(5.3)	—		灰釉		10YR6/4	
12	黄色土層 (表土)	輸入陶磁	染付碗	—	(1.7)	—			E群もしくはF群	10G7/1	
13	表層	輸入陶磁	染付碗	—	(2.1)	—			E群もしくはF群	7. SYR/1	
14	表土	金属製品	銭 (寛永通宝)	—	2.43 × 2.37	—	2g				
15	攪乱埋土中	金属製品	銭 (無文銭)	—	2.29 × 2.21	—	2g				

第19図 主郭表土及び攪乱出土遺物

られる。15は無文銭である。銭径は最大径22.9mm、最小径22.1mmであり、かなり小ぶりである。全体が錆に覆われているが輪や郭、背が平滑、銭厚は極薄である。露出する地金は黒みを帯びており、中世後期～近世初頭の所産である。こうした無文銭は第8次調査ではV区で2点（判読不明と報告）出土しており、森氏が在城した時期の流通銭の状況を示すといえる。

2. 主郭確認トレンチ最下層出土遺物（第20図）

16～19は確認トレンチ最下層（第12図・15層）からの出土である。16・17はかわらけである。16は非ロクロ成形で、緩やかに湾曲する体部を有する。口縁部のヨコナデは顕著でない。17も非ロクロ成形で口縁端部にわずかに面を有する。表面劣化のため調整等は不明である。

18・19は瀬戸美濃産陶器である。18は大窯第3段階後半～第4段階の鉄軸天目茶碗である。回転ナデ成形後、全面に鉄軸を施す。口縁部の屈曲は弱い特徴的な器形である。19は錆軸壺である。「大海」と呼ばれる大型の茶壺と考えられる。回転ナデ成形後、全面に錆軸を施す。頸部から口縁部は緩やかに外反し、口縁部上面を平坦に仕上げる。



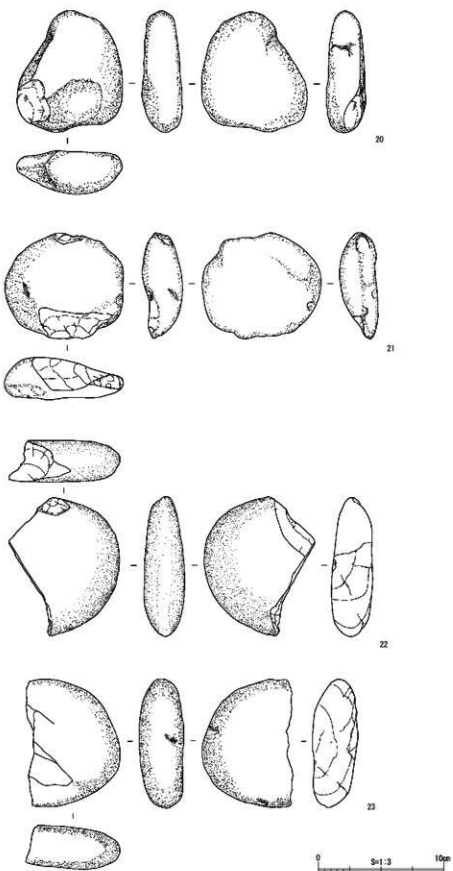
図版	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底・高台径 (cm)	その他	胎土	時期・分類	色票	特記事項
16	15層	土師器	かわらけ	—	(1.8)	—				10YR8/2	非ロクロ
17	15層	土師器	かわらけ	—	(2.0)	—				10YR8/3	非ロクロ、表面劣化のため調整不明
18	15層	瀬戸美濃	天目茶碗	(9.8)	(2.7)	—	鉄軸	大窯3段～4	7.5YR2/1		
19	15層	瀬戸美濃	壺（帯入かや）	—	(3.8)	—	錆軸	大窯	NI/		

第20図 主郭確認トレンチ最下層出土遺物

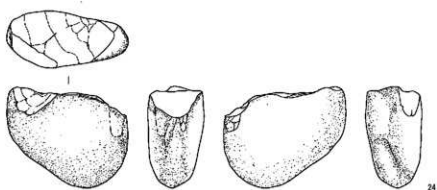
3. 主郭遺構出土遺物（第21・22図）

SK02からは多数の円礫が出土した。円礫の大半に打撃痕があるが、当初礫を遺物として扱っていなかったため、打撃痕のない礫を廃棄していた。このため有打撃痕礫の比率などは不明である。いずれの礫にも手插れなどはみられず、接合個体も確認できない。礫には砂岩、閃緑岩、花崗閃緑岩、花崗斑岩があり、いずれも麓を流れる木曾川川原に存在する礫である。

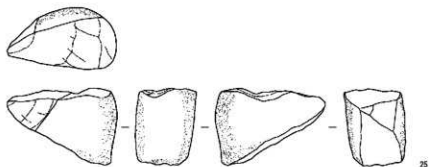
20は花崗斑岩製で重量361gを測る。隅部分から一回の打撃で20×30mmの範囲を剥離し、この打撃以外の打撃はみられない。21は砂岩製で重量307gを測る。上下二方向からそれぞれ1回ずつ打撃を行うが、置台に置いて打撃を行う同時打撃ではない。22は閃緑岩製で重量405gを測る。一側面を3回に分けて打撃し、原礫のほぼ半分を欠失する。23は花崗斑岩製で重量403gを測る。1回の打撃でほぼ半分に分割する。表面側にも複数の剥離が存在するが、分割時の同時剥離である。24は花崗斑岩製で重量462gを測る。1回目の打撃で円礫をほぼ半分に分割した後、2回目の打撃で隅部を幅20mmにわたり剥離する。25は花崗斑岩製で重量273gを測る。上下二方向に破断面があるが、図上で下面の破断は表面が風化しており、古い破断面と考えられる。従って本資料も1回の打撃によって礫を分割したのち、側面を1面剥離する。26は花崗閃緑岩製で重量495gを測る。上方からの打撃による剥離と、側面からの打撃が確認できる。



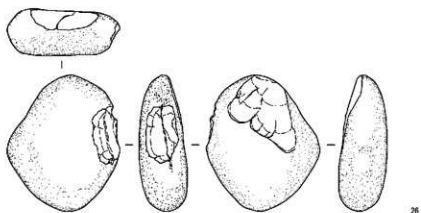
第21図 主郭SK02出土石器1



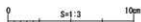
24



25



26



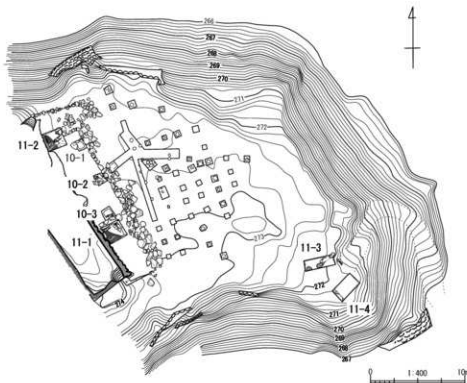
図版	出土位置	種別	器種	長軸	厚さ	重 (g)	胎土・素材	色別	備考
20	SK02	石製品	円盤	9.8	2.9	361	花崗斑岩	5Y8/2	
21	SK02	石製品	円盤	8.3	3.1	307	砂岩	5Y5/1	
22	SK02	石製品	円盤	10.8	3.2	405	閃緑岩	10B6/1	
23	SK02	石製品	円盤	10.2	3.6	403	花崗斑岩	7.5Y8/2	
24	SK02	石製品	円盤	8.0	4.3	462	花崗斑岩	5Y8/2	
25	SK02	石製品	円盤	6.1	4.6	273	花崗斑岩	10Y8/2	
26	SK02	石製品	円盤	11.1	4.0	495	花崗閃緑岩	10GY7/1	

第22図 主郭SK02出土石器2

第3節 東Ⅰ（東腰曲輪）の調査

(1) 調査区の設定（第23・24図）

東Ⅰには井戸跡という伝承が残る石組みが残存する。平成19年度に行われた第2次調査では、石桁遺構の内側にコの字状にトレンチを設けて調査が行われたが、巨石に妨げられ十分な記録化が行われなかった。今後の整備に向けて、この石桁遺構の性格把握が必要となり、令和4年度の第10次調査では北端（10-1調査区）、中央（10-2調査区）、南端（10-3調査区）の合計3箇所、令和5年度の第11次調査では主郭石垣との接合部の北側に11-1調査区、南側に11-2調査区を設定し、調査を行った。また、門などの施設の確認のため、11-3及び11-4調査区を調査した。



第23図 東Ⅰ調査区位置図

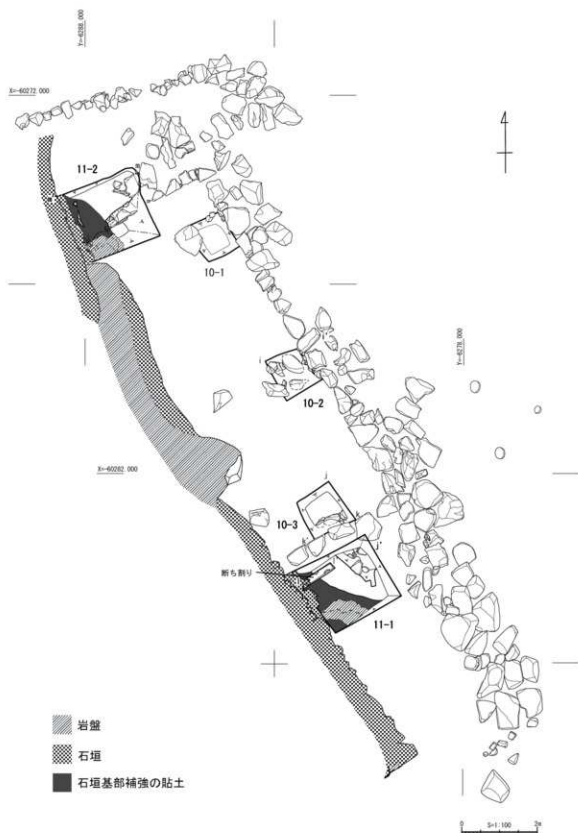
(2) 検出遺構

10-1 調査区

表土より下で直径10～40cm前後の礫を主体とする層を検出した。礫層は現地表面より50cm以上の深度があり、壁面から礫の転落が予測されたため現地表面より約50cmで掘削を断念した。礫層中からは、過去の調査で埋め戻しに用いられた土嚢袋が出土したことから、これらの礫層は平成19年度調査の埋め戻しによるものと思われる。更に現状地表面に残る石組の下からも土嚢袋が出土し、現状地表面より上に確認できる桁状の石組みは、平成19年度の第2次調査後に設置されたものであることが再確認された。

10-2 調査区（第25図）

現地表面から約50cm下で一辺100cm前後の巨石を検出した。これを除去する手段がないため、この深さで掘削を断念した。堆積している礫層内から現代の遺物が出土したため、10-1調査区同様に礫層は第2次調査時の埋め戻しされたものであることが確認された。



第24図 東Ⅰ西側調査区平面図

10-3 調査区 (第26・27図)

他の調査区と同様に表土下に現代の遺物を含む礫層がみられた。これらの礫層を除去したところ、南壁面で土嚢袋によって養生された明黄褐色土と、それに覆われる石積みを確認した。この明黄褐色土(3層)上面の標高は、現在東Ⅰに点在する礎石基部の標高(272.8m)とほぼ一致する。この明黄褐色土層直下には織豊期の瓦片が多く含まれる。また、石積み背面には栗石と考えられる直径10cm前後の礫を多く含む礫層がみられた。

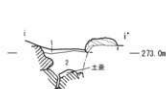
11-1 調査区 (第28図)

石枡遺構の背面に設定した調査区である。掘削限界までの基本層位は主に三層に分かれる。下層(7層)は破砕した瓦を含む整地層、中層(6層)は上面に瓦を大量に含む整地層、上層は石垣に貼り付けるように敷設した整地層(4・5層)と水平に敷設した整地層(3層)によって構成される。7層から出土した瓦には森忠政期の天守瓦と推定されている桐文軒平瓦が含まれる。その後堆積する上層整地層(3層)は忠政期ないしはそれ以降の整地層であり、3層上面の標高が現在の東Ⅰ礎石上面の標高と合致するため、3層と東Ⅰ礎石群の基盤を形成する整地土は同時期の可能性が考えられる。

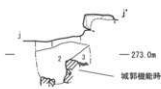
11-2 調査区の調査 (第29図)

石枡遺構北端に設置した調査区である。表土および現代の礫層を除去した直下で整地層及び石組みを検出した。整地層は上下二層で、いずれも石垣に後出する。上層は11-1調査区3～5層に該当すると考えられる。また、調査区西壁では主郭石垣が基盤岩の上に構築されている状況が明らかになった。

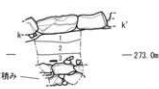
以上のように石枡遺構周辺の調査では現状地表面に残る石組みが平成19年度の第2次調査後に配置されたものであることが明らかになった。ただし、石組み直下には織豊期に遡る同規模の石枡遺構があることが再確認された。この遺構は桐文軒平瓦を含む整地層の下もしくは同一面に築かれており、忠政期以降に石組みが設置され、同時期ないし設置後に整地層が敷設されたと考えられる。この整地層は標高から東Ⅰ全体に散見される礎石のベース面と同時期であることが想定される。



第25図 i-i' 土層図



第26図 j-j' 土層図



第27図 k-k' 土層図



第28図 l-l' (段ち割り) 土層図

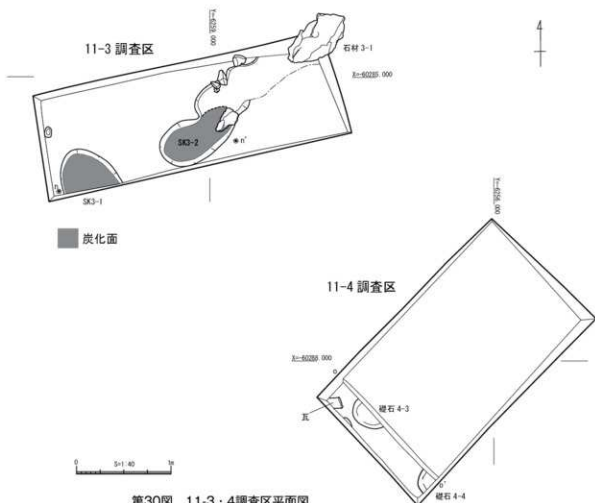


第29図 m-m' 土層図

- 1 表土
- 2 過去調査の埋土
- 3 10YR6/8 明黄褐色 中粒砂(径50～100mmの角礫を多く含む、織豊期の瓦を含む、整地層)
- 4 7.5YR 4/6 褐色 極細砂(しまり強く、粘性あり)
- 5 7.5YR 5/8 明褐色 極細砂(しまり強く、粘性あり)
- 6 10YR 3/4 暗褐色 中粒砂(しまり強く、粘性なし、小礫、瓦を多く含む、桐文瓦出土、整地層)
- 7 10YR4/6 褐色 中粒砂(しまり強く、粘性あり、瓦を多く含む、6層と一連の整地層)
- 8 10YR 7/6 明黄褐色 中粒砂(小礫ほとんど含まない、整地層か)
- 9 10YR 8/4 淡黄褐色 中粒砂(φ40mmの礫を多く含む、石垣基部補強の埴り土)

11-3 調査区の調査 (第30図)

搦手道より東Iへ取り付く付近に設定した調査区である。基本層序は表土(層厚4cm程度)、その下に整地層と考えられる黄褐色土(10-1調査区上層整地層相当)である。この黄褐色土上面を遺構面として調査を行い、現状地表面にみられた大型石材と炭化物を含む土坑が検出された。なお、これらの調査区の遺構名については遺構種を示すアルファベットに調査区を示す「3」を付与し、その後に番号を付した。



第30図 11-3・4調査区平面図

土坑 (第30・31図)

SK3-1、SK3-2 トレンチ西端で長軸60cm、短軸40cmを測る炭化物を含む土坑(SK3-1)を、トレンチ南端で長軸90cm、短軸35cmを測る同様の炭化物を含む土坑(SK3-2)をそれぞれ検出した。この二つの土坑は不整形で、埋土はしまりが弱く、遺物を含まない。比較的近年に形成された土坑と想定される。

石材

石材 3-1 トレンチ東端に長軸74cm、短軸40cmを測るチャート亜角礫塊が存在しており、門など施設の礎石である可能性があるため、これを検証した。表土が石材下面に達していることが判明し、二次的に移動していることが明らかになり、門など入り口にかかわる施設の礎石である可能性は低い。

11-4 調査区の調査 (第30・32図)

11-3 調査区対角に設定した調査区である。基本土層は11-3調査区と同様で、表土直下で整地層(10-1調査区上層整地層相当か)を検出した。整地層上面で遺構検出を行ったが、遺構は検出できなかった。また、整地層の堆積状況の確認のため、調査区南端幅30cmの範囲を断割り状に掘削したところ、整地土直下25cmで礎石2基を検出した。礎石は直径40cm前後の川原石で、2つの礎石の推定中心間距離は約110cmを測る。これらの礎石は下位の整地層に据えられた状態であった。これらの礎石の性格については現状では判断が難しいが、曲輪内の位置関係から門もしくは橋などの可能性が考えられる。



第31図 n-n' 土層図



第32図 o-o' 土層図

- | | |
|-------------------|-------------------------------|
| 10 7.5YR4/4 褐色 | 細砂 (φ2~20mmの炭を含む) |
| 11 2.5Y7/6 明黄褐色 | 細砂 (φ2~20mmの礫を含む) |
| 12 10YR5/4 にぶい黄褐色 | 細砂 (硬直じる、硬く叩きしめた整地層か) |
| 13 10YR5/4 にぶい黄褐色 | 細砂 (礎石のような川原石を含み、その裏面に瓦を多数含む) |

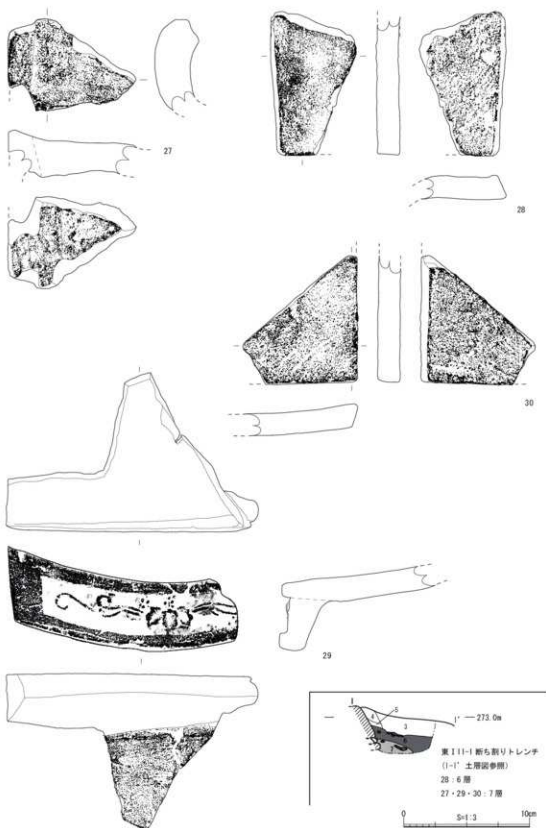
(3) 出土遺物

11-1 調査区出土遺物 (第33図)

27~30は瓦であり、28は整地層中層(第28図-6層)、27・29・30は整地層下層(第28図-7層)からそれぞれ出土した。27は軒丸瓦である。胎土は石英、長石、チャートを含み、瓦当と丸瓦端部の接合部にカキヤブリ痕が残る。外区内縁に幅約7mmの面取りを施し、内側の瓦当接合部周辺に指ナデ痕と指オサエ痕がみられる。外側および瓦当面は表面劣化のため、調整痕は不明瞭である。28は平瓦である。胎土は石英、長石、黒色粒子を含み、密である。成形台との接地面にハナレズナの痕跡が一面に残り、端部には成形台の痕跡が残るため、凹面形の成形台による成形と考えられる。破断部以外の端面はヘラケズリし、凹面はナデによって調整する。29は軒平瓦である。瓦当紋様は五三桐紋の中心飾りに唐草紋を配する。胎土は石英、長石、チャート、赤色酸化土粒を含み、密である。凹面全体に成形台から粘土板を切り離す際の糸切痕と、離型剤であるハナレズナが確認できることから、凸型成形台によって成形されていると考えられる。凹面に加え、凸面にも糸切り痕が残る。瓦当の接合部にみられるカキヤブリ痕から、瓦当成形方法は顎貼り付け技法によると考えられる。顎接合部には、ナデ調整を施す。上外区外縁に幅約7mmで、凹面を上からみた際に三日月状の面取りを施す。瓦当面、瓦当側面、上外区および下外区内縁、顎端面はヘラケズリを行い、顎裏面は板状工具によるナデを施す。30は平瓦である。胎土は石英、長石、黒雲母、赤色酸化土粒を含み、やや粗である。焼成はやや不良であり、土師質を呈す。凸面および凹面にわずかに糸切痕を確認できるが不明瞭であり、全面において表面劣化のため調整痕は不明である。

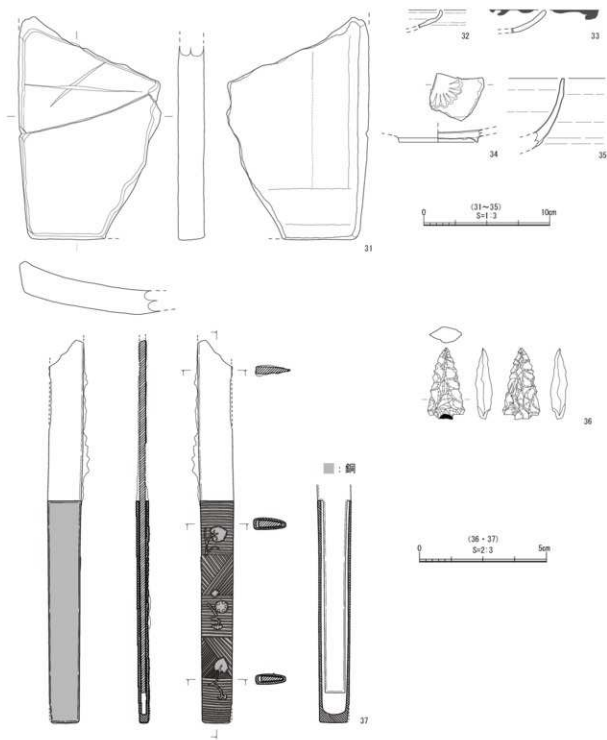
11-2 調査区出土遺物 (第34図)

31は整地層上層(第29図-8層)から出土した平瓦である。胎土は石英、長石、黒雲母、赤色酸化土粒を多く含み、密である。凸面全体にハナレズナがみられ、凹型成形台を使用して成形されていると考えられる。凹面端部に約5mmの均一な幅で面取りを施す。凸面および凹面はナデ調整だが、特に凸面端部付近には板状工具によるナデを施す。側面および端面はヘラケズリを行う。



図版	出土位置	種別	器種	法量 (cm)	色調	備考
27	7層	瓦	軒丸瓦	(10.2) × (7.4) × (2.5)	2.5Y7/4	
28	6層	瓦	平瓦 (透瓦瓦?)	(11.5) × (6.7) × (1.9)	5Y3/1	いぶし瓦
29	7層	瓦	軒平瓦	(11.9) × (19.8) × (1.8)	10Y4/1	網紋
30	7層	瓦	平瓦	(10.2) × (9.1) × (1.8)	2.5Y7/2	

第33図 東 I 11-1調査区出土遺物



図版	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底・高台径 (cm)	その他	材質	時期・分類	色図	備考
31	8層	瓦	平瓦		(17.3) × (11.2) × (2.0)					2.9Y/3	
32	11層	瀬戸黄瀬	灯明皿	—	(1.4)	—			大塚1段~2	7.5Y/2	
33	表土層	土師器	かわらけ	—	(1.8)	—				7.5Y/2/6	保存層
34	表土層	瀬戸黄瀬	丸皿	—	—	(6.4)		瓦軸	大塚	胎土: 2.9Y/3 厚釉: 7.5Y/2	内面に印花文あり
35	表土層	瀬戸黄瀬	丸皿	—	(5.7)			鉄軸	大塚2~3	5Y/2/3	
36	表土層	石製品	石鏃	2.8 × 1.5 × 0.6			2枚				チャート
37	表土層	金属製品	小銃	(15.2)	(1.3)		長さ (0.25)				鉄 (刀身)、銅 (柄) 成分・構造分析可能

第34図 東 I 11-2~4調査区出土遺物

11-3 調査区出土遺物 (第34図)

32は第31図11層から出土した瀬戸美濃産の灯明皿である。回転ナデで成形され、内面には成形時の凹凸を顕著に残す。東濃型山茶碗の系譜上に位置付けられ、大窯第1段階後半～2段階である。

11-4 調査区出土遺物 (第34図)

かわらけ(33)、瀬戸美濃産陶器(34・35)、石鉢(36)、金属製品(37)が出土した。全て表土からの出土である。33は非口ロ口成形のかわらけである。外面にユビオサエの痕跡が残るが、内面は剥離のため調整等は不明である。口縁部に油煙が厚く付着する。胎土は橙褐色で、長石と赤色酸化土粒を少量含む。34は灰釉丸皿である。見込み中央部に菊文を型押し、高台は貼付高台である。釉の厚さは1mm以下で、全体に貫入が入る。底部外面も薄く施釉され、輪下子痕がみられる。35は大窯第2～3段階の丸碗である。湾曲する体部と、わずかに屈曲する口縁部を有する。内外面に鉄釉を施し、体部外面下端は露胎である。36はチャート製有茎式石鉢である。打点はすべて除去され、表面に礫面は観察できない。茎部は欠損する。両側縁はほぼ直線であり、正・裏面ともに全面に多方向から押圧剥離を施す。37は刀の鞘にともなう小柄である。銅製の柄と鉄製の刀身の茎から刃部半ばまでが遺存する。表面が緑青で覆われた柄がほぼ完存するが、柄に挿入された刀身茎の形状や把握部に施された文様の詳細を肉眼観察のみでは明らかにし得なかったため、X線CTスキャンを実施して作図し、全体の構造や各部法量、文様細部の把握を試みた。柄を含めた全体の残存長は15.2cm、刀身の残存長は13.4cmで、刃部が残存長6.4cm、幅1.3cm、厚さ2.5mm、茎部が長さ7.0cm、幅0.8cm～1.0cm、厚さ1.7～2.5mmである。柄は断面形がやや角張った例卵形を呈し、外寸で長さ8.8cm、長径1.1～1.2cm、短径0.4～0.5cm、内寸(茎挿入部)で長さ8.5cm、長径0.9～1.1cm、短径0.2～0.3cmである。刀身茎の端部から柄の内側端部まで0.9cmの空隙が認められる。刀身は直角に切れ込む両関づくりである。関は柄縁に接しており、茎全体が柄に挿入されている。茎は柄尻に向かって若干幅を狭めるもののほぼ直線的に伸び、茎尻を直角一文字に切る。X線CTスキャン画像でも柄には部材の継ぎ目が確認できず、鋳造により一体でつくり出されたものと考えられる。また、刀身茎には目釘孔が認められず、刀身を柄に挿入したのちこれらを固定する構造を別途有していない。一方、柄の断面画像からは、茎と柄の空隙部分に何らかの有機質材が充填されたような状況(第49図)を看取できることから、紙のような素材を巻くことで茎の厚みを調整し、テーパによって刀身を柄に固定した可能性が想定される。

柄の佩表面には、精細な文様が表現されている。柄縁から2.1cmと、そこから1.6～1.7cmずつに区切った五つの文様区を設け、それぞれに幅0.5～1.0mmほどの畝を連続で配置する波板状の地下文様を整えたうえで、これらをまたいだ植物モチーフを配する文様構成を採る。五つの文様帯には、柄と直交方向に畝を並べた図柄と、文様区に対角線で区画し、その対角線に対して直交方向と水平方向の畝をそれぞれ並べた図柄を交互に並べる。植物文は、柄間の中央付近に花と葉、蕾を表現するほか、柄縁・柄尻側にもそれぞれ葉と茎、蕾が表現される。各部の特徴から、植物文は片喰を表したものと推測される。これらの文様は、花の細部や葉の葉脈などを明瞭に表したものであることから、鋳型に彫り込んだ文様を鋳出ただけで仕上げたものとみられる。合わせ鋳型を用いた鋳造と推定するが、型割り線などは明確に確認できない。

第4節 米蔵跡の調査

(1) 基本層序と検出遺構 (第36～38図)

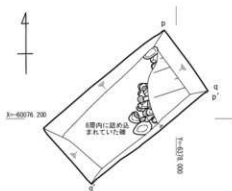
調査地は東から西への斜面地形であり、トレンチ西端と現状地表面との比高差は約0.7mである。本来は西側石垣が平坦面まであり、石垣構築に伴い裏込め等が造成されていると想定される部分である。排水路工事に伴う現代盛土(1～2層)を除いた段階で比較的しまりの良い盛土(3～10層)を検出したが、後者は遺物から近世以降の盛土であることが明らかとなった。斜面崩落の可能性があるため、現状地表面より約160cmの掘削としたが、掘削深度内では美濃金山城の時期の裏込め等の造成層及び遺構は検出できなかった。

(2) 出土遺物 (第39図)

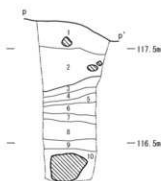
38～43は瀬戸美濃産陶器で、38～40は1層、41～42は6層、43～44は10層からそれぞれ出土した。38は近世の鉄絵鉢である。回転ナデ成形の後、全面に黄灰釉を施し、内面に鉄絵を描く。39は近世の植木鉢である。回転ナデ成形の後、全面に鉄釉を施す。40は近世の常滑鉢である。回転ナデ成形で作られ、内外面無釉である。41は古瀬戸後Ⅱ期ないしⅢ期の平碗である。回転ナデ成形で作られ、口縁部はナデが弱く直線的に収める。内外面に灰釉を施す。42は近世の碗類の底部である。高台は貼付高台で、底部外面に回転糸切痕を残す。内外面に透明釉を施すが、底部外面は露胎である。底部内面に鉄絵を描く。43は鉄釉皿類である。回転ナデ成形で作られ、器壁の凹凸が著しい。44はかわらけであり、ロクロ成形で底部外面に回転糸切痕を残す。



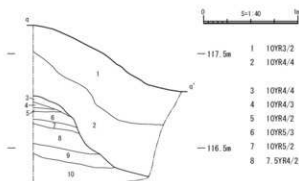
第35図 米蔵跡調査区位置図



第36図 米蔵跡トレンチ平面図

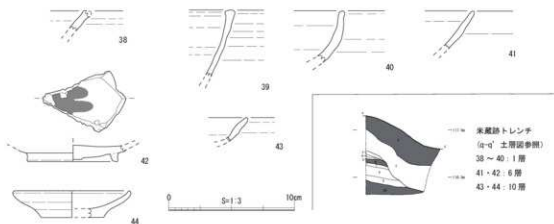


第37図 p-p' 土層図



第38図 q-q' 土層図

- 1 10YR3/2 黒褐色 硬層 (Φ10～20mmの礫を主体とする。水路建設の際の遺土)
- 2 10YR4/4 褐色 硬層 (Φ10～20mmの礫を主体とする。土管、コンクリート片を含む水路建設の際の遺土)
- 3 10YR4/4 褐灰色 硬混粗砂 (Φ2～5mmの礫を多く含む。近世以降の造成土)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色 硬混粗砂 (Φ5～10mmの礫を多く含む。近世以降の造成土)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色 硬混粗砂 (Φ10～20mmの礫を多く含む。近世以降の造成土)
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色 硬混粗砂 (Φ5～10mmの礫を多く含む。近世以降の造成土)
- 7 10YR5/2 灰黄褐色 硬混粗砂 (Φ5～10mmの礫を多く含む。近世以降の造成土)
- 8 7.5YR4/2 灰褐色 硬混粗砂 (Φ20mm～100mmの礫を多く含む。近世以降の造成土。Φ100mm前後の蓋戸礫が散在して認められる)
- 9 10YR3/3 暗褐色 硬混粗砂 (Φ20～30mmの礫を多く含む。近世以降の造成土)
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色 硬混中粗砂 (Φ2～5mmの礫を含む。遺物を含む近世以降の造成土。下部は粘性強い)



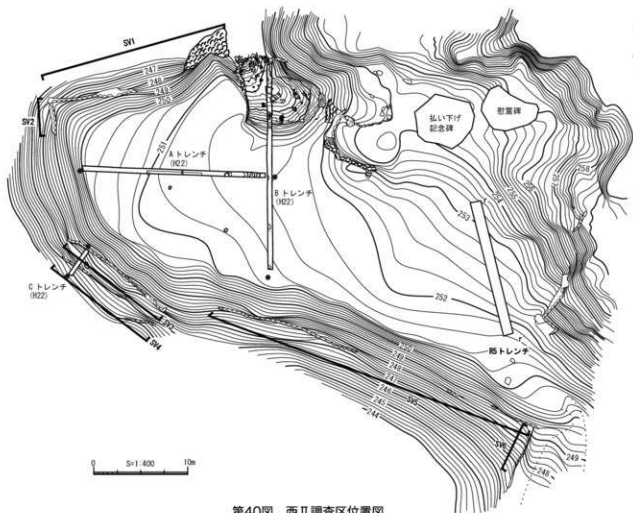
図番	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底・高台径 (cm)	その他	胎土	時期・分類	色図	備考
38	1層	瀬戸黄流	鉢	—	(1.4)	—	—	黄灰胎	近世	5Y7/3	内面に鉄粒あり
39	1層	瀬戸黄流	細木鉢	—	(5.3)	—	—	黄灰胎	近世	5YR4/4	
40	1層	常滑	鉢	—	(4.1)	—	—	—	近世	10YR7/3	
41	6層	古瀬戸	平碗	—	(3.0)	—	—	灰胎	古後ⅡかⅢ	胎土: 5Y6/8 釉土: 7.5Y7/1	
42	6層	瀬戸黄流	碗	—	(1.3)	(7.2)	—	透明胎	近世	鉄粒: 10YR5/3 胎土: (底部外面) 2.5Y5/3, (底部内面) 2.5Y7/4	内面に鉄粒あり
43	10層	瀬戸黄流	皿	—	(1.9)	—	—	—	—	内側: 10YR2/2 外側: 7.5YR3/3	
44	10層	土師器	かわらけ	(9.0)	(2.1)	(5.0)	—	—	—	2.5YR/3	口縁部破損。 底部外面も切欠あり

第39図 米蔵跡出土遺物

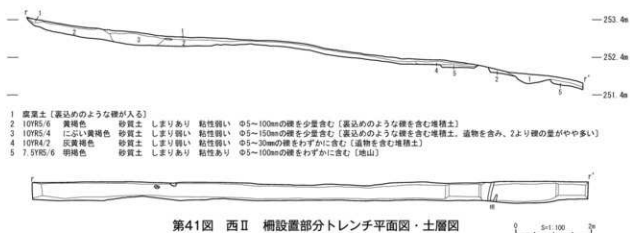
第5節 西Ⅱ（三の丸）

（1）基本層序と検出遺構（第40～41図）

安全柵設置予定部分に幅約0.5m、長さ約14.7mのトレンチを設定した。地表面から30cm程度で地山となり、現地形と同様に北側から南側にかけて下がっていく地形である。基本層序は表土（腐葉土層）、堆積土層、地山となる。トレンチ部分において、礎石や土坑等の遺構は検出されなかった。堆積土には大塚期の遺物とともに現代陶器片が入るため、地山より上は現代の堆積と考えられる。



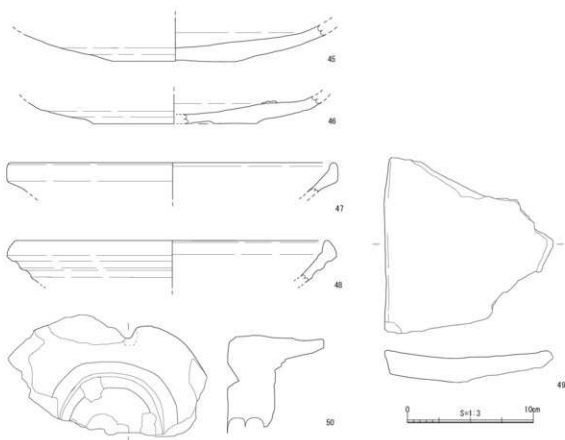
第40図 西Ⅱ調査区位置図



第41図 西Ⅱ 柵設置部分トレンチ平面図・土層図

(2) 出土遺物 (第42図)

遺物は、表面採集で瀬戸美濃産陶器2点、平瓦2点、現代陶器1点の計5点、2・3層から瀬戸美濃産陶器3点、かわらけ1点、道具瓦1点、現代陶器5点の計10点が出土した。その中で、6点を図化した。45、46は表採された大皿であり、底部のみのため詳細な時期は不明だが、瀬戸美濃産の大窯にあたる。いずれも錆釉により灰褐色を呈し、焼成は良好堅緻である。47、48は2層から出土した鉢鉢であり、錆釉により灰褐色を呈し、焼成は良好堅緻である。49、50は瓦であるが、西Ⅱより山上側の曲輪からの転落もしくは運び込まれた可能性が高い。50は全体的に灰色を呈し、他の瓦片と色調や焼成は似ている。欠損しているが、上面はm字形を呈する。表面の凹線の部分は型ズレのような痕跡が、裏面はナデにより調整した痕跡がみられる。鬼瓦の眼の可能性が考えられる。



図版	種別	器種	出土位置	口径 (cm)	器高 (cm)	底・高台径 (cm)	その他	釉薬	時期・分類	色調	備考
45	瀬戸美濃	大皿	表採	—	(2.9)	(10.0)		錆釉	大窯	釉薬：2 SYR5/3 胎土：2 SY7/4	
46	瀬戸美濃	大皿	表採	—	(2.2)	(13.0)		錆釉	大窯	釉薬：10YR6/3 胎土：10YR8/6	内面に付着物あり
47	瀬戸美濃	鉢鉢	2層	(25.8)	(2.4)	—		錆釉	大窯1	釉薬：7 SYR4/1 胎土：10YR6/6	
48	瀬戸美濃	鉢鉢	2層	(24.7)	(3.4)	—		錆釉	大窯2	釉薬：5YR4/2 胎土：10YR8/6	

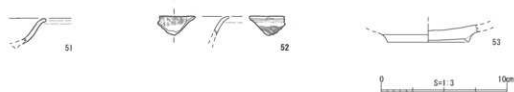
図版	種別	器種	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	容量	色調	備考
49	瓦	平瓦	裏採	(13.4)	(14.0)	1.9	—	7 SY7/2	

図版	種別	器種	出土位置	流量 (cm)	色調	備考
50	瓦	道具瓦	3層	(15.9) × (8.9) × 7.5	10Y5/1	

第42図 西Ⅱ出土遺物

第6節 表面採集遺物について(第43図)

45は白磁皿である。僅かに湾曲する体部を有し、口縁端部にはわずかに沈線を刻み、口唇部を玉縁状に成形する。回転ナデ成形で作られ、回転ナデのピッチは約6.0mmである。胎土は灰褐色で黒色粒子を少量含む。釉薬は内外面全面に施釉し、口唇部はやや厚い。表面には全面に微細な気泡がみられる。登城口付近採集である。46は染付碗である。口縁部は強く外反し、釉の発色は良好である。内外面は著しく被熱する。B群のもので、東Iにて採集した。47は大窯第3～4段階の瀬戸美濃産の鉄釉皿類である。回転ナデ成形で、高台は貼付高台である。底部外面は露胎で回転糸切痕を残し、輪ドチの痕跡が確認できる。主郭入口付近で採集された。



図番	出土位置	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底・高台径(cm)	その他	胎土	時期・分類	焼成・色調	備考
51	登城口表探	輸入陶磁	白磁皿	—	(2.0)	—				釉薬: 2 SY7/2 胎土: 7 SY7/2	
52	東I表探	輸入陶磁	染付碗	—	(1.5)	—				100YR/1	
53	主郭入口付近 表探	瀬戸美濃	皿類	—	(1.4)	6.3		鉄釉	大窯3か4	釉薬: 5YR5/2, 5YR1 7/1 胎土: 2 SYR7/2	

第43図 各所表採遺物

第5章 自然科学分析

第1節 美濃金山城跡のプラント・オパール分析

(1) はじめに

岐阜県可児市に所在する美濃金山城跡では、主郭盛土の検討を目的として、堆積物を採取した。以下では、採取した堆積物試料についてプラント・オパール分析を行い、盛土に含まれるイネ科植物について検討を行った。

第2表 分析試料一覧

試料No.	採取層位 (第12図)
No. 1	7層
No. 2	9層
No. 3	10層
No. 4	11層
No. 5	12層

(2) 試料と方法

分析試料は、主郭盛土から採取した5試料である(第2表)。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第44図に載せた。

(3) 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から、試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(第3表)、分布図を示した(第45図)。

第3表 試料1g当りのプラント・オパール個数

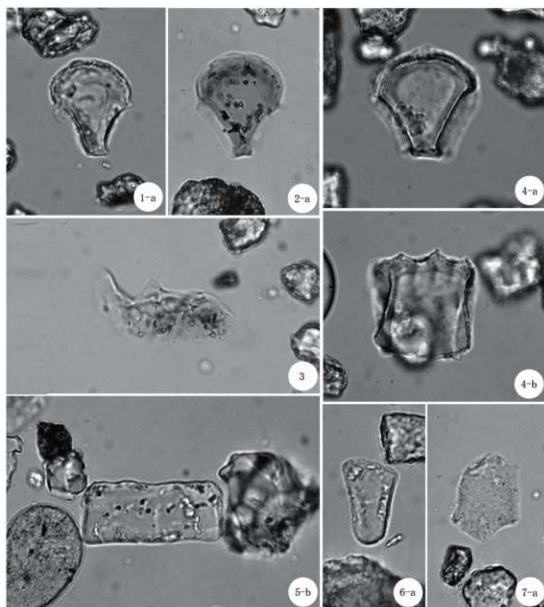
	イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	メダケ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
No. 1	16,300	0	72,900	14,100	6,500	7,600	5,400	44,600
No. 2	4,400	0	7,800	0	1,100	1,100	0	3,300
No. 3	4,500	0	0	0	0	2,300	0	0
No. 4	26,400	1,200	3,600	0	0	3,600	0	3,600
No. 5	19,300	0	13,600	0	0	21,500	7,900	6,800

5試料から検出された機動細胞珪酸体は、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、メダケ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の6種類である。また、イネの初殻に形成される珪酸体(イネ穎破片)もNo.4で検出された。このうち、イネ機動細胞珪酸体に注目すると、全ての試料から検出されており、産出量は4,400～26,400個/gである。

(4) 考察

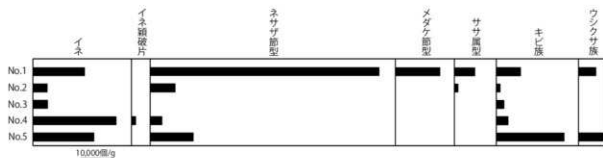
検鏡の結果、全ての試料からイネ機動細胞珪酸体の産出が確認でき、No.4からはイネ穎破片も検出された。よって、各層位にはイネの葉身が含まれており、No.4にはイネの初殻も含まれていたと考えられる。ただし、各層位の産出量には相違があるため、No.1とNo.4、No.5はイネの葉身が多く含まれているが、No.2とNo.3はイネの葉身は比較的少なかったと考えられる。

その他では、No.1の植物珪酸体組成に特徴があり、ネザサ節型を筆頭に、メダケ節型やササ属型といったタケ亜科の機動細胞珪酸体の産出量が突出している。No.1には、ネザサ節型やメダケ節型、



1. イネ機動細胞珪酸体 (No. 1) 2. イネ機動細胞珪酸体 (No. 5)
 3. イネ破片 (No. 4) 4. ネザサ節型機動細胞珪酸体 (No. 1)
 5. キビ族機動細胞珪酸体 (No. 5) 6. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (No. 1)
 7. ササ属型機動細胞珪酸体 (No. 1)
 a: 断面 b: 側面

第44図 植物珪酸体写真図版



第45図 植物珪酸体分布図

ササ属型といったタケ亜科の葉身が多く含まれていた可能性がある。

さらに、No.1 と No.5 ではキビ族とウシクサ族の機動細胞珪酸体突出するため、No.1 と No.5 にはキビ族とウシクサ族の葉身が多く含まれていた可能性がある。

<引用文献>

藤原宏志 1984 プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探索—。考古学ジャーナル, 227, 2-7.

第2節 美濃金山城跡出土小柄の自然科学分析

(1) 分析対象 美濃金山城東 I 11-4 調査区出土小柄 1本 (第46図)

(2) 分析内容

材質分析 (第47図)

資料の材質を調べるため、蛍光 X 線分析を行った。分析は柄地金露出箇所 (1, 2)、直線文様凸部 (3)、植物文様凸部 (4)、刀身 (5) で行った。

蛍光 X 線分析は試料に X 線を照射し、その際に試料から放出される各元素固有の蛍光 X 線を観測することにより、試料の構成元素を同定する分析方法である。分析には下記の装置を用い、大気雰囲気下、管電圧 50 kV、管電流 1000 μ A、コリメータ 0.2×0.2 または 0.5×0.5 mm²、照射時間 120 sec/point の条件で行った。なお、X 線管球のターゲットはロジウム (Rh) である。

使用機器：蛍光 X 線分析装置「EA6000VX」(日立ハイテクサイエンス)

内部構造観察

内部構造の観察のため、X 線透過撮影を行った。X 線透過撮影は X 線の透過率が資料の厚さや密度、元素によって異なることを利用し、資料内部の構造を非破壊的に調べる分析方法である。撮影には下記の装置を用い、管電圧 120 または 180 kV、管電流 2mA、照射時間 1min の条件で行った。

使用機器：X 線発生装置「MG225」(Philips)、イメージングプレート「UR-1 型」(富士フイルム)、画像読込装置「AC-7HR」(富士フイルム)

(3) 結果

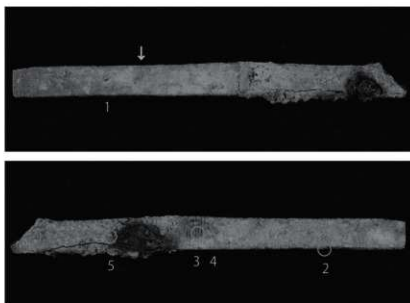
材質分析 (第48・49図)

蛍光 X 線分析で得られたスペクトルを第48・49図に示す。柄を測定した4つの分析は全て同様のスペクトルを示し、主として銅 (Cu)、スズ (Sn)、鉛 (Pb) を検出した (第48図 1-3、第49図 4)。よって、柄は青銅製と考えられた。また、刀身の分析においては主として鉄 (Fe) を検出した (第49図 5)。

内部構造観察 (第49図)

X 線透過撮影で得られた像を第49図に示す。第49図 (4) を除き、他の3つは第46図上の状態に設置した刀子に対して X 線を照射している。一方、第49図 (4) は第46図矢印の方向から X 線を照射している。

柄部において、凸線による直線文様、及び植物文様が観察された (第49図 (3))。また、第49図 (4) の像より、これらの文様は片側の面 (第46図下の面) に施されていることが確認された。透過像において目釘は観察されなかった。また、第49図 (3) で観察される柄と茎の間の下側において、弱い吸収を示す物質が観察されることから、柄に茎と柔らかい物質と一緒に押し入れ、摩擦により刀身を固定していたものと考えられた。



第46図 出土した小柄の
分析箇所



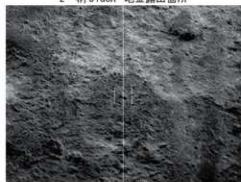
1 柄 SideB-地金露出箇所



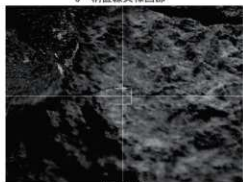
2 柄 SideA-地金露出箇所



3 柄直線文様凸部

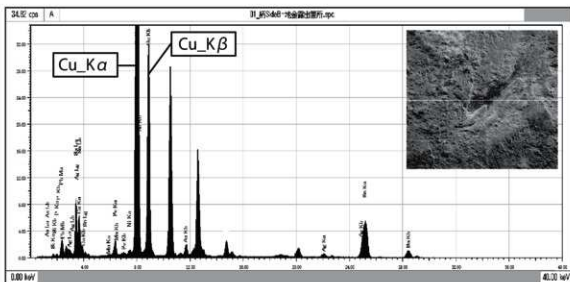


4 植物文様凸部

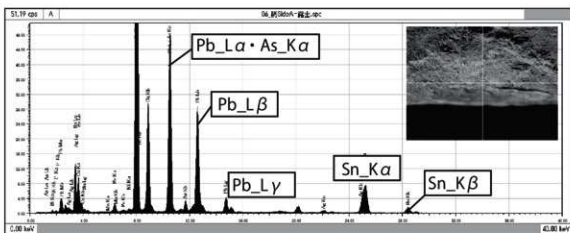


5 刀身

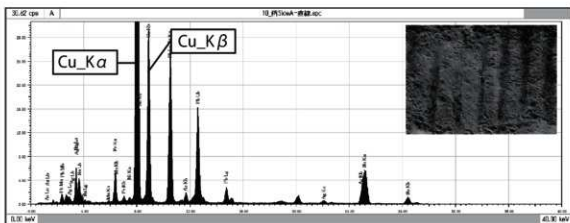
第47図 小柄分析箇所詳細



1 柄 SideB-地金露出箇所

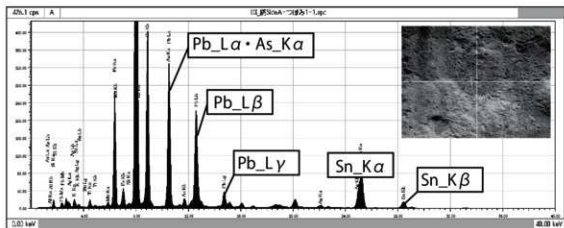


2 柄 SideA-地金露出箇所

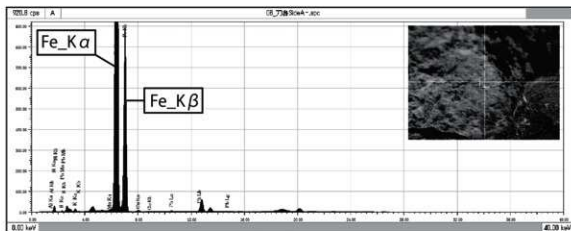


3 柄直線文様凸部

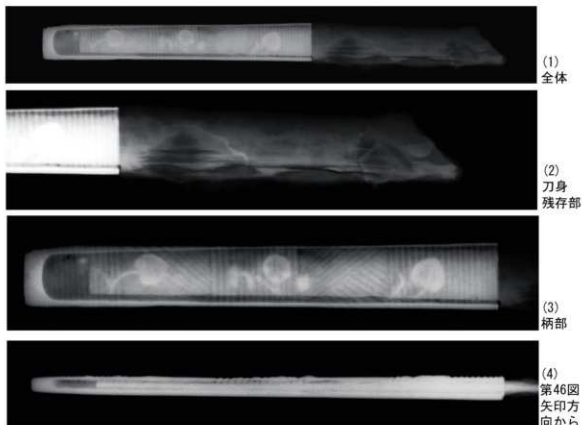
第48図 蛍光X線スペクトル



4 植物文様凸部



5 刀身



第49図 蛍光X線スペクトル、X線透過画像

第6章 まとめ

第1節 主郭及び東Ⅰの造成について

美濃金山城主郭は既往の調査で前・中・後期の3時期にわたる変遷を提示しており、下記のように整理される（可児市・滋賀県立大学2021）。

前期（築城から大窯第3段階後半以前）：土坑や礫敷遺構があり、虎口には角石の礎石があるが、関連性は不明。御殿下層礎石建物があった可能性があり、石垣と天守を持たない。

中期（大窯第3段階後半～大窯第4段階）：天守相当の瓦葺建物の構築、石垣・入り口内枘形虎口の設置が行われる。天守全体に整地が行われ、御殿は上層礎石建物に変更される。

後期（大窯第4段階以降）：破却により石垣が崩され、建物も解体される。

〔大窯第3段階後半の暦年代は1575～1590、第4段階は1590～1610年代が想定されている¹⁾。〕

今回の調査における重要な成果として、主郭トレンチの断ち割りによって、主郭部分が削り出しではなく大規模な整地によって造成されていること、その時期が大窯第3段階後半～大窯第4段階に相当することが判明した点である。この地形改変を伴う大規模な造成は主郭下層整地層（第12図9～15層）によって行われているが、この下層整地層は御殿下層礎石のベースとなっている。つまり、御殿下層礎石建物造成は主郭の大規模な造成と同時期であることが明確になったといえる。既往の調査では御殿下層礎石は前期に位置付けられていたが、今回の調査によって中期に石垣の設置を伴って行われた可能性が高まったと言える。美濃金山城における前期の存在は想定以上に小規模であったと思われる。

その後、主郭はさらに整地を行って大規模な改造が行われたと考えられる。調査区全体に上層整地層（第12図7層）が敷設され、御殿上層礎石が配置される。第9次調査ではこの段階に天守関連遺構と考えられる内側に面を持つ石垣SV1・2が設置されたことが判明しており、さらにこの段階で平入虎口から枘形虎口への改変が行われている。

さて、東Ⅰでは小規模なトレンチ調査であったが、現在地表面に残る枘形石組みが、近年の修景によるものであることが明らかになった。同時に、下層に城郭機能時の同規模の石組みが残されていることも明らかになった。東Ⅰには上・中・下3層の整地層が確認できたが（このうち中層整地層は石垣付近に限定的に敷設されたもの）、下層整地層は石垣遺構の裏込めとなるもの、上層整地層はこれを埋め殺して現在地表面に残る礎石のベースとなっているものである。この下層整地層からも中期（森忠政期）に位置付けられている桐紋軒平瓦が出土している。主郭付近の瓦の出土が上層整地層に伴う造営以降であり、その使用に天守などの施設が想定されていることを考えると（可児市・滋賀県立大学2021）、東Ⅰの造成は主郭上層遺構の設置時に並行するものと考えられる。下層整地層と石垣の関係を見ると、11-1 トレンチでは下層整地層が石垣に取り付く状況が確認でき、石垣と下層整地層は前者が先行する関係にある。この前後関係も整地層の並行関係を補強する成果と言える。

以上の点から、美濃金山城の中核ともいえる主郭及び東Ⅰは中期（森忠政期）に、主に整地によって地形改変を伴う大規模な造成が行われ、この際石垣の造成が行われたと推定できる。その後きわめて短い期間に、主郭部分にはさらに整地が行われ、桐文瓦を伴う建物（天守か）が造営され、虎口も枘形に変更されたものと思われる。この際、東Ⅰの造成が行われ、水堀と考えられる石組みが

設置されたと推定できる。

その後、きわめて短い時間幅の中で東Ⅰに整地が行われ、建物の立て替え、石組みの機能停止が行われたものと考えられる。改めてこれらの変遷を下記の通り整理しておく。(第50図)

前期(大竈第3段階後半以前)：主郭に土坑や礎敷遺構があるが、遺構同士の関連性は不明。

中Ⅰ期(大竈第3段階後半)：主郭にて大規模な造成工事、御殿下層建物の造成、石垣の設置

中Ⅱ期(1587年(桐紋使用認可以降))：主郭にて御殿上層建物の造成、内向き石垣とそれに伴う建物(天守?)の造成、虎口構造の改変

東Ⅰにて造成と石垣遺構の設置、東Ⅰ下層礎石建物の造営

中Ⅲ期(1587年(桐紋使用認可以降))：東Ⅰにて上層整地層の敷設と建物の造営、石組遺構の廃絶

後期(大竈第4段階以降)：廃城

美濃金山城跡は、チャートなどの岩山に造られた城であり、石垣と同一面に岩盤が表出していたり、掘削したトレンチ内においても岩盤がみられたりする。土が手に入りにくい城において、中期としている森忠政の段階の中で大規模な造成及び改築等が数度にわたり行われている様子が明らかとなった。文献史料等がなく、短期間での改変原因は不明であるが、時期やその詳細を詰めていくことが今後の課題となる。

第2節 主郭入り口構造の推定

前節で復元した主郭の構造変遷に伴い、主郭へ取り付く入り口の構造も変化したものと考えられるが、2018年度に行われた第8次調査では中Ⅰ期(報告書では前期)の礎石を覆う整地層の上に、内枳形虎口を形成する石垣(SV3)が据えられる状況が確認され、内枳形虎口の成立が中期以降であることが明らかとなった。同時に現在虎口内に散在する石材のほとんどが近年になってから据えられたものであることも判明し、虎口に伴う門の存在は明確にできなかった。さらに北側石垣(SV4)掘付近で、類例のない棧敷状構造物の礎石列が発見されたことから、虎口成立当時の入り口構造については課題を残すこととなった(可児市教育委員会・滋賀県立大学2019)。

このように虎口入り口の門構造については下段で門の痕跡が明らかにできなかったため、第10・11次調査では虎口から御殿への取り付きに調査区を設定し、この部分の入り口構造に焦点を当てた調査を行った。

第10次調査段階では、第1遺構面で2つの礎石(礎石6・8)を検出し、地表面に残る礎石24との位置関係から、脇門を持つ薬区門の存在を考えたが、第11次調査で全体を掘削した結果、礎石25の南西150cmの地点から礎石抜き取り痕と考えられるビットSP17が検出された。これにより、礎石17・25が柱列として並ぶことになり、礎石24も門の礎石と考えることが難しくなった。

さらに南東に隣接する溝SD20が雨落ち溝と考えた場合、礎石24の位置まで雨落ち溝が直線的に延伸していることから、礎石24の位置までは軒が伸びていた可能性が高くなった。このことから、礎石24・25および礎石6は門の礎石ではなく、玄関など建物入り口にかかわる礎石の可能性が想定される結果となった。

では、具体的にどのような玄関構造を想定すべきであろうか。残念ながら今回の調査では調査面積や攪乱のため入り口構造を復元する十分なデータが得られなかった。しかし、明確な門構造を推定できなくなったことで、車寄せや式台玄関状の構造を検討する必要が提示できたことは重要な成

果と考える。ただし、この問題に関連して、今後の参考とすべく附編として織豊期の城郭における入り口構造の事例を集成した。その結果、当該期の城郭主郭において、門を持たず直接車寄せなどの玄關構造を配する事例が見つからず、なお検討が必要な結果となった。これについては今後の更なる事例集成と検討を重ねていく必要があると言えよう。

第3節 自然科学分析との関係

今回の調査では主郭断ち割り内下層整地土の複数層（第12図7・9～12層）よりサンプルを採取し、植物ケイ酸体の分析を行った。目的は大量の盛土の由来と炭化物についてその内容を確認するためである。前述のとおり美濃金山城が所在する山塊はチャートを主体とした岩塊であり、土壌の希薄な地質環境にある。それにもかかわらず、主郭及び東Ⅰは削り出しではなく大量の盛土によって造成されており、この膨大な土の由来が課題である。肉眼観察からはチャート風化土を主体とする淘汰の良い細砂によって構成されており、耕作土のような土壌化箇所はみられない。分析の結果、サンプル内より多量のイネ機動細胞珪酸体を検出したが、盛土が耕作土でない以上、これらイネ機動細胞珪酸体は耕作土の混入ではなく、稲藁や初穀などの形で持ちこまれたものと考えられる。

これらイネ機動細胞ケイ酸体の由来は明確ではないが、造成のある段階で藁を素材とした建材を焼却した可能性が考えられるだろう。あるいは大量の土砂を運搬するモッコや、資材を梱包する籠なども考慮すべきと考えられるが、現段階では推定の域を出ない。今後こうした建設段階の行為についての関心を払っていく必要があることを提起しておきたい。

註

(1) 古瀬戸大塚期の暦年代は藤澤 2005・2009 を参照している。なお、消費地における陶磁器の時間的変遷は漸移的であり、生産地における様式編年をもとに消費地遺跡を明確に時期区分できないとする鈴木正貴の指摘(鈴木2001)も念頭におきつつ、便宜的に編年区分を指標として記述しておきたい。

<参考文献>

- 愛知県史編さん委員会編 2007 『愛知県市』別編第2巻 中世・近世瀬戸系
井川祥子 2006 「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』高志書院
大類伸 1966 『日本城郭全集』人物往来社
小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
可見市教育委員会 2013 『金山城跡発掘調査報告書』
可見市教育委員会・滋賀県立大学 2019 『国史跡美濃金山城跡発掘調査概報』Ⅱ
岐阜県可見市・滋賀県立大学 2021 『美濃金山城跡主郭発掘調査報告書』
兼山町史編さん委員会 1972 『兼山町史』
国宝犬山城天守修理委員会 1965 『国宝犬山城天守修理報告書』
鈴木正貴 2001 「尾張の拠点城館遺跡出土の瀬戸美濃窯産陶器—時期別組成の分析を中心に—」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第2号（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団
日本中世土器研究会編 2021 『新版 概説中世の土器・陶磁器』真福社
藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—シンポジウム資料集』
藤澤良祐 2009 「瀬戸・美濃大塚編年と城の年代観」『戦国時代の城—遺跡の年代を考える—』高志書院

わずかな整地と少数の遺構

前期（大塚第3段階後半以前）



下層御殿遺構

中Ⅰ期（大塚第3段階後半）



上層整地の上に上層御殿を再建。
天守？を創建。虎口を形制に変更

中Ⅱ期（1587年（桐紋使用認可）以降）



東Ⅰの造成と下層御殿石垣物の遺留

中Ⅲ期（1587年（桐紋使用認可）以降）



東Ⅰの再整地、上層建物への
変更と石垣遺構の埋め戻し

第50図 美濃金山城跡主郭及び東Ⅰ変遷模式図（建物構造及び位置関係はイメージ）

附編 1 美濃金山城跡における破城の実態

今回の調査では東Ⅰにおいて整地層下層から桐紋軒平瓦が確認されたことから、前章で指摘した通り美濃金山城中期に相当する森忠政期に大規模な城郭の改変が行われていたことが明らかになった。これは城郭としての城内の利用最終段階における様々な変化と一連のものとしてとらえる必要がある。そこで、本節では城郭利用の最終段階である破城をとりあげ、美濃金山城の位置づけを検討する。

美濃金山城は慶長6年(1601)前後に廃城になったとされ、それに伴い破却行為が行われたことが指摘されている。ここでは美濃金山城における破城の特性を明らかにするために、城郭を巡る地域特性が近似する近江における同時期の城郭でみられる破城との比較を行う。

(1) 「破城」について

まず、破城そのものの概要に触れておきたい。城郭そのものを人為的に破壊する行為を「破城」といい、それは「城わり」とも呼ばれる。破城を行う目的は主に2つあり、1つ目は敵側の城を軍事拠点として使用できないようにするため、2つ目は自分達の城を敵側に使われないようにするためである(中井2007)。つまり破城には、新たな支配者が破壊する場合と、自らが破壊する場合が存在する。城郭は外観を重視しているため、破城に際しては外からよく見える建造物・石垣・曲輪・土塁などが破壊され、逆に外から見えにくい部分は残ることが多いとされている(藤木・伊藤編2001)。破城の報告事例で多いのは石垣や石積みをも崩すというものであるが、この他にも大量の土と破却した際に出た石材で堀や虎口(出入口)を埋めるという場合もある。

(2) 美濃金山城跡の破城の状況

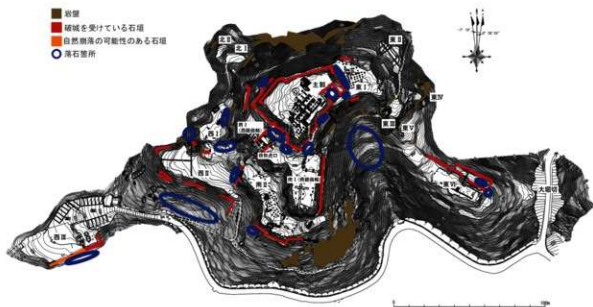
考察を行うにあたり、城郭内において破壊を受けた石垣の位置と、石垣のどの部分がどの程度破壊されているかの2点に着目した(第51図、第4表)。

美濃金山城では城域全体の動線上や「見えること」を意識した箇所(石垣が築かれ、特に主郭は四方に築かれている。これらの石垣を現地踏査して作成した図からは残存石垣全てに破城行為が行われていることが確認できる。通常、破城に際しては石垣の石材を落下させるが、石垣の破壊と落石が伴っているのは、石垣が集中して築かれている主郭を中心とした箇所である。落石が伴う場合、基本的には石垣の真下の場所で落石が見られるが、美濃金山城では石垣が築かれていない箇所でも落石が確認できる。また、石垣の破壊に対して落石の量が全体的に少ない状況であった。

石垣の破城の状況として、石垣全体の残存状況は東Ⅰの北側及び南側を除き、多くが50%未満である。東Ⅰの石垣は急斜面に構築されており、破城が困難であったため、残存状況が良いと想定される。天端石は、南Ⅱの西側(北面)は一部であるが、その他の石垣全てで落とされていた(現代の積み直しが行われ、破城後の状況が不明瞭な枳形虎口以外)。また、隅石に関しては残存率が80%未満であり、残存している隅石は1、2石程度で、多くの石材が落とされている。そのうち主郭の東側(北面)は全ての隅石が落とされていることが特徴であり、入念に破城が行われている様子がうかがえる。

(3) 近江で見られる破城との比較

美濃金山城の破城を、小谷城跡・鎌刃城跡・佐和山城跡・八幡山城跡・水口岡山城跡の5つの



第51図 美濃金山城跡内の破城を受けた石垣と落石箇所



1 中丸 (南より)



2 山王丸 虎口部 (南より)

第52図 小谷城跡石垣写真



1 主郭東側 (東より)



2 主郭東側 (北東より)

第53図 美濃金山城跡石垣写真

城郭と比較してみたい。上記の城郭の共通点として、城郭が破壊される際に石垣にまで手が加わっていることが挙げられる。以下では、比較対象とした各城郭の破城についてまとめる。(第4表)

小谷城跡 (長浜市教育委員会 2019・2020a・2020b)

小谷城跡で行われた破城は、天端石の破壊に重点が置かれたものであり、かつ各曲輪の虎口部が特に集中して破壊されたと考えられる。加えて、石垣を破壊する際は天端石を落とすと同時に隅石を落とすことも重要視されたとされ、その程度は場所によって異なる。そのような破壊パターンは虎口部に集中するが、対して城郭の動線から外れる位置にあるような石垣は破壊度が低い傾向にある。

鎌刃城跡 (米原市教育委員会 2006)

全体的な破壊パターンは小谷城跡と似ているが、隅石が確認できない箇所がほとんどである点は小谷城跡と大きく異なる。天端石を落とし、かつ全体の残存率が低いのは主郭とその周辺の曲輪に集中しており、城域内において主郭部が重点的に破壊されたと考えられる。また、石垣の破壊に対して落石が少ないことも特徴である。この原因として、城域内で石材が移動させられたケースと、何らかの理由があって城外へ持ち出されたケースが想定される。

佐和山城跡 (滋賀県教育委員会 1990、織豊期城郭研究会 2018、下高 2018)

石垣が築かれていたとされるのは本丸の北側と東側である(下高 2018)。植生繁茂のため実見できたのは本丸東側の2石のみであり、これらが隅石のように残っている。周りに石垣らしき石材は見られず、不自然に残っているのが特徴である。城域全体に残っている石垣が少なく、そもそも石垣に使用できそうな石材自体が極端に少ないため、彦根城築城の際に再利用されたという記録と結び付けて判断されることが多い。

八幡山城跡 (滋賀県教育委員会 1990)

山上に築かれた石垣と、山麓の秀次居館の石垣の破壊度が異なることが特徴である。山麓では破城の痕跡が見られるのに対し、山上の石垣の残存率が非常に高い。秀次居館は山上の城郭と同時期に築かれており、破城を受けた時期に大きな差があるとは考えにくい。このことから、主に破城の対象となったのは秀次居館であった可能性がある。また、山上の石垣よりも山麓の方が破壊度が大きいにも関わらず、落石が極端に少ない。そのため、秀次居館は破壊の主対象とされただけでなく、その際に出た石材も城外へ持ち出された可能性がある。

水口岡山城跡 (滋賀県教育委員会 1990)

鎌刃城跡と同様に水口岡山城跡も発掘調査によって破城の実態が明らかになっており、築かれている石垣の大半は破城の対象になったと考えられる。破壊のパターンとしては、上記の城郭と同じように天端石を重点的に破壊しており、この際は全体的に石垣の残存率が低い。隅石に関しては鎌刃城跡で見られた石垣のように隅石が確認できないものが多いが、水口岡山城跡の石垣は2m以上の高さを持つものが多いことが特徴である。

(4) 近江で見られる破城と美濃金山城の比較

天端石が重点的に破壊されていることや、その際石垣の残存率が50%未満になるといった特徴は、近江の城郭で見られる破城の状況と類似している。主郭の四方の石垣は重点的に破壊されていることが分かる結果になっており、城域内において主郭が重要視されたことがうかがえる。美濃金山城跡の特徴として、隅石の残存率が80%未満で破壊度が高いことが挙げられる。特に注目したいのは主郭の東側(北面)であり、この部分は天端石と隅石ともに全て落とされ、かつ、全体の残存率が

50%未満と、破壊度の高さが分かる。隅石が全て落とされているケースは近江の城郭でもほとんど見られず、美濃金山城跡以外で見られるのは小谷城跡の中丸、山王丸のみであった。しかし、小谷城跡では隅石とその周りの築石がともに落とされていたのに対し（第52図1・2）、美濃金山城跡は、築石を残して隅石のみが落とされている（第53図1・2）。また、小谷城跡の中丸の石垣は高さが約1mであるのに対し、美濃金山城跡の主郭の石垣は約3mと破壊範囲が広域に及ぶことも特徴的である。つまり、美濃金山城跡の主郭の東側（北面）ではより丁寧に隅角部を破壊された可能性がある。

（5）美濃金山城跡における破城の実態

破壊された石垣の部位に注目したうえで、破城の方法と石垣の構築技術には相関関係がある可能性を指摘したい。この根拠を述べる際に注目したいのは、石垣の造設は時代が進むにつれて隅角部の造りがより丁寧になったということである。石垣の構築技術の発展が顕著に表れるのは隅角部とされており、特に石材の長辺と短辺が交互になるように積む算木積みの技法の有無、明瞭さの観察により、石垣の発達段階をうかがうことができる。築城時期が大きく異なる小谷城跡と美濃金山城跡の石垣の破壊に注目してみると、小谷城跡では石垣の角を形成している石材とともに隅り合わせの石材が落とされているのに対し、美濃金山城跡では角を形成している石材のみ落とされている。時期差や地域差、破城の要因など勘案する必要もあるが、石垣を構築する際に隅角部が意識されていく中で、破城において隅石にも局所的に手を加えるようになった様子がうかがえる。

今回の発掘調査では忠政期に目まぐるしく城郭構造が変更された可能性が明らかになったが、こうした城郭整備が石垣でも進められている。第7次調査ではそれまでの平入虎口が枳形虎口へと変更されたことが明らかになっているが（可児市教育委員会・滋賀県立大学 2019）、こうした一連の整備で隅角を強化した先進的な石垣が構築された故に、また、破城も隅角部でより厳しいものであったことが指摘できよう。今後の調査の進展により地下遺構と地表面観察の組み合わせで、さらに詳細な城郭機能終了時の姿を明らかにできると考えられる。

<参考文献>

- 可児市教育委員会 2013 『金山城跡発掘調査報告書』
可児市教育委員会・滋賀県立大学 2018 『可児市埋文調査報告 52 国史跡美濃金山城跡発掘調査概報Ⅰ』
可児市教育委員会・滋賀県立大学 2019 『可児市埋文調査報告 55 国史跡美濃金山城跡発掘調査概報Ⅱ』
岐阜県可児市・滋賀県立大学 2021 『可児市埋文調査報告書 58 美濃金山城跡主郭調査報告書』
滋賀県教育委員会 1990 『滋賀県中世城郭分布調査』7
織豊期城郭研究会 2018 『織豊期城郭研究会 2018 特別研究集会 豊臣の城からみた佐和山城』
下高木 2018 『豊臣期佐和山城の形成過程』『織豊期城郭研究会 2018 特別研究集会 豊臣の城からみた佐和山城』織豊期城郭研究会 pp.23-42
中井均 2007 『今、破城を再検討する』『織豊期城郭研究会』第9号 織豊期城郭研究会 pp.3-14
中井均 2022 『戦国の城と石垣』高志書院
長浜市教育委員会 2019 『長浜市埋蔵文化財調査資料第170集 史跡小谷城跡確認調査報告書（平成28～30年度）』
長浜市教育委員会 2020a 『史跡小谷城跡整備基本計画』
長浜市教育委員会 2020b 『史跡小谷城跡総合調査報告書』
藤木久志・伊藤正義ほか（編）2001 『城破りの考古学』吉川弘文館
米原市教育委員会 2006 『米原市埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 米原町内中世城跡分布調査報告書』

附編 2 織豊期城郭における入り口施設と美濃金山城

美濃金山城跡の主郭虎口における調査はこれまで複数回行われてきたが、平成30年度に行われた第7次調査によると、主郭虎口は新旧2時期の変遷があることが明らかになった。主郭虎口に石垣が造成される前の第1期では主郭入り口に平入虎口と小規模な門が、そして織豊期にあたる第2期には桁形虎口が形成されたと考えられ、一の門にあたる部分における礎石の存在から大規模な櫓門の存在が想定されている（可児市教育委員会・滋賀県立大学2019）。しかし、桁形虎口を構成する主郭側の入り口の実態が不明であり、防衛施設の全容が不明であった。そこで今回行った10・11次調査では、主郭の入り口施設の実態解明に重点を置いて発掘調査を実施した。その結果、美濃金山城の主郭入り口（二の門）は明確な門構造を明らかにできず、御殿の一部に玄関を設けていた可能性が考えられるようになった。しかし今回の調査区周辺は遺構の残存状況が良好でなく、検討に耐える情報が得られていない。ここでは今後の検討に向けて、織豊期の城郭における入り口構造を集成しておきたい。

(1) 問題の所在

城郭の入り口施設については、千田嘉博氏の研究に代表される虎口研究がこれまでその主流を担ってきたが（千田1987）、虎口とセットで存在する門構造の研究は多くない。正見泰氏は金沢城を事例とした近世城郭における入り口構造を検討した（正見2016）。中世城郭では、高田徹氏が喰い違い虎口において石垣や土塁の普請と上部建築物の作事のセット関係について3つのパターンを提示、そして近世城郭における喰い違い虎口において一定規模を有する櫓門を対象として事例の検討を行い、作事が虎口の軍事的な発達に影響を与えたと指摘している（高田1999）。同じく溝口彰啓氏は織豊系城郭の虎口において、普請と作事における構造的な特徴を複数事例から検証し、城郭全体における虎口空間の位置づけを行った（溝口2012）。

織豊期については、五島昌也氏が名護屋城で検出された5つの門遺構において、桁行、梁行、礎石及び柱穴数、それらの標高、礎石掘り形、平面図、そして門周囲の立面図等のデータベース化を行い、そのデータを踏まえたうえで門の形状の推定を行っている（五島1996）。また、河西克造氏が甲信越（河西2001）、木戸雅寿氏が近江（木戸2001）、松田直則氏が四国の城郭（松田2017）、そして多田暢久氏が近畿の陣城（多田2001）において、それぞれ集成を踏まえたうえで各地域における門をはじめとした礎石建物について言及している。さらに松井一明氏は発掘調査による成果を踏まえて戦国期から織豊期にかけて時期ごとに門の種類と配置について検討を行っている（松井2016）。中井均氏は虎口のなかでも特に門によって造り出される「空間」に着目し、織豊系城郭の虎口の概念について発掘調査によって検出された遺構をもとに検討を行った。その結果、2つの門によって閉塞された空間をもつ桁形虎口は織豊系城郭には認められず、その出現は慶長5（1600）年以降であると指摘する（中井1999）。

ここで示した研究論考だけがすべてではないが、周知の通り虎口そのものの研究と共に虎口に付随する門に関する研究も多数行われている。しかし美濃金山城が所在する美濃地域を対象とし、主郭虎口に絞った研究が行われていないのが現状である。こうした現状を踏まえ筆者は美濃金山城周辺の城郭、特に愛知県および岐阜県の城郭における考古資料での主郭入り口施設の集成を行う。対象とする城郭は、織田信長が足利義昭を奉じて京都に上洛した永禄11（1568）年から徳川家康が征夷大將軍に任命され江戸幕府を開く慶長8（1603）年の間に機能していた城郭かつ、発掘調査が

行われ、報告書より主郭の入り口施設の実態のわかる城郭とする。

(2) 事例の検討

以下、管見に及んだ範囲での資料に関して紹介する。(第5表)

1. 岩崎城 (愛知県日進市: 岩崎城跡発掘調査団 1987)

天文7(1538)年に丹羽氏清によって築かれ、天正12(1584)年までに改修が行われた後、慶長5年に廃城となった。築城当初である15世紀末～16世紀前葉前後のⅠ期、16世紀半ばまでのⅡ期、天正12年までのⅢ期、そして廃城の慶長5年前後までのⅣ期の遺構変遷が確認されている。このうちⅠ～Ⅲ期にかけて門と櫓が存在した(第54図-1)。検出された門遺構は主郭虎口から離れた西側に位置し、Ⅰ～Ⅲ期とも同位置である。門構造としては2本の鏡柱と6本の控柱の計8本によって構成されるものと想定されているが、2本の鏡柱と2本の控柱で構成される可能性も考えられている。この鏡柱の柱穴の大きさは北側が径90cm、深さ40cm、南側が径70cm、深さ30cmを測る。そして2基の鏡柱の中央には門の蹴放を支えるための径40cmを測る穴が検出されている。

2. 桑下城 (愛知県瀬戸市: 愛知県教育・スポーツ振興財団ほか 2013)

15世紀後半以降に築かれたとされ、尾張と三河の境目の城として機能していた。織田氏と今川氏の攻防に際し、今川氏から派遣された城監が永禄元(1558)年前後に西・北・東側に堀を築き、本丸を中心に改修が加えられた。その後永禄3(1560)年の桶狭間の戦い以降に廃城されたとされる。門は本丸中央の北端で検出されており(第54図-2)、約40cm四方の花崗岩を4基使用した礎石門である。柱間は東西2m×南北3mであり、それぞれの礎石は高さをそろえるために浅い穴を掘って掘えられている。門の北側には堀があり、北側前面、南東隅、南西隅に段がみられないことから、北側に開口する門が想定されている。また門の両脇には土塁が存在した可能性が指摘されており、門から城内へ入ると通路が東西に折れ曲がる構造となっている。門の形式は不明であるが、時期としては大窯第2-3段階の遺物が出土していることから1530～1590年と考えられる。

3. 上ノ郷城 (愛知県蒲郡市: 蒲郡市教育委員会 2012)

築城時期は不明だが15世紀中葉以降から鶴殿氏が在城しており、永禄5(1562)年の徳川家康による落城により久松氏が入る。その後天正18(1590)年に廃城となる。主郭虎口部分で柱心々間約5mの支柱基礎石と考えられる扁平石が2基検出され、建物の規模が南北約4間、東西約3間の門遺構が検出されている(第54図-3)。それぞれの礎石の大きさは北東側が25×40cm、南東側が45×60cmであり、主郭内建物群は永禄5年の落城後に築かれたものと考えられていることから、この門の時期は他の建物と同様に永禄5年以降と考えられる。また久松期以前の鶴殿期、つまり織豊期以前の遺構として4段の石造りの階段が付随する。門の形式は不明であるが、主郭の大手門であると想定されている。

4. 長篠城 (愛知県新城市: 鳳来町教育委員会 2004)

永正5(1508)年に菅沼元成が豊川と宇連川の合流地点に築き、新城城築に伴い天正4(1576)年に廃城となる(ただし出土遺物には天正4年以降のものも認められる)。主郭と帯曲輪は土橋で繋がりが、食い違い土塁を2回折れて主郭に入る構造となっており、その2回折れた先に遮閉施設として目隠し塀を持つ櫓(塀)が構えられている(第54図-4)。規模は4間×3間以上の3.8m以上を測り2列並列する。柱間は0.75～1.2mを測り柱穴の平面形は円形・楕円で幅20～30cm、深さ6～21cmである。この虎口の形状は城の攻守を強固にするために行われた改修(天正3(1575)か)によるもので、長篠城における最終期の様相である。

5. 鶴尾山城（岐阜県郡上市：岐阜県文化財保護センター 1992）

遠藤盛数が1550年代に東殿山城の支城として築き、築城後は何度か改修されている。16世紀末に廃城となった。主郭は上段と下段からなり、主郭虎口は1回折れの桁形虎口で、主郭上段に入る。報告書では門としての報告は上がっていないが、遺構図から主郭虎口の一の門にあたる部分において2基の柱穴が確認できる（第55図-5）。柱心々間は1.7mを測り、この遺構については棟門の可能性が高いと判断した。

6. 鳥羽城（愛知県西尾市：愛知県埋蔵文化財センター 1996）

天文10（1550～）年代から永禄10（1567）年の間に築かれ、天正18年に廃城となり、江戸期以降は墓域として利用された。主郭虎口は食い違い土塁で2回折れる。報告書では門としての報告は上がっていないが、遺構図から主郭虎口の一の門にあたる部分において2基の柱穴が確認できる。柱心々間は2.7mを測り、この遺構については鳥居の可能性もあるが現状としては棟門の可能性が高いと判断した。

7. 岐阜城（岐阜県岐阜市：岐阜市教育文化復興事業団ほか 2023）

建仁元（1201）年に二階堂行政が砦を築いたことに始まり、永禄10年に織田信長が入城する。この信長入城により改修が行われたが、一部では信長以前の斉藤期の遺構を維持して使用していた箇所もある。二ノ門では両脇に石垣を構えその石垣間は9尺、約2.7mを測る。しかし、この石垣は分類が難しく構築時期は不明である。

8. 新城城（愛知県新城市：イビソク名古屋支店 2013）

奥平昌昌が長篠城を廃して天正4（1576）年に新たに築き、正保2（1645）年に廃城となるまで存続した。廃城後は新城城の主郭をそのまま利用して陣屋が設置された。主郭虎口は外桁形で、一の門にあたる部分において門とその城内側に番所的な建物（以降番所）が検出された（第55図-8）。門は6基の柱穴からなる桁行2間以上×梁間1間の規模をもつ掘立柱建物（建物西側は調査区外）で、出土遺物がないことから建設及び廃絶時期は不明である。門の形態については不明であるが、それぞれの柱穴間は1.7～2.0mを測る。番所は7基の柱穴からなる桁行3.95m以上、東側の梁間3.00mの規模をもつ掘立柱建物（建物西側は調査区外）である。門と同様に建設及び廃絶時期は不明であるが、城の存続時期から両者は16世紀末～17世紀中頃と考えられる。

9. 高山城（岐阜県高山市：高山市教育委員会 1986・1988）

天正13（1588）年もしくは天正18年に金森長近によって築かれ、金森氏6代の居城であったが、元禄5（1692）年に天領となり同8（1695）年に廃城となった。高山城の主郭は上段と下段からなり、上段には本丸屋形が構えられた。上段の本丸屋形の入り口部では玄関跡として2基の石材が隣接して検出され、玄関へとつながる石段の根石であると考えられている（第56図-9）。また『飛騨国高山城絵図』によると本丸屋形の玄関部分は「玄関門」と記載がある。

10. 妻木城（岐阜県土岐市：土岐市教育委員会他 2002）

康永年間（1342～45）に土岐氏によって築かれ、関ヶ原の戦いに改修が行われた可能性がある。万治元（1658）年に廃城となった（ただしこの時廃城となったのは山麓部である）。縄張的にはⅠ郭（主郭）とⅡ郭をあわせて主郭とみなすことができることから、Ⅱ郭虎口を主郭虎口とする。この主郭虎口では鏡柱の礎石1基と控柱の礎石2基が検出されており、もう1基の鏡柱の礎石については抜取痕もない（第56図-10）。柱心々間は東西8尺5寸の2.57m、南北6尺の1.81mであり、門の形式については薬区門あるいは櫓門であると考えられている。この門の時期は17世紀初頭で、

おそらく上述の通り関ヶ原の戦い時に改修された際に構築された遺構である。

以上 10 の事例の検討を行った。この中で美濃金山城の入り口構造と同様の事例を確認できた事例はなく、主郭の入り口には門が確認できる。そのため美濃金山城のように虎口を通過した主郭の入り口に御殿の一部を設けたとすると、貴重な事例であると評価できる。

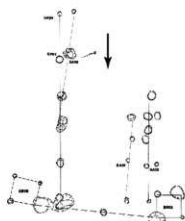
さらに全体を年代順にみてみると、織豊期城郭の中でもそれ以前、もしくは初期に築城された城郭では、柱穴によって構成されている事例が多いことがわかる。しかし、織豊系城郭を構成するうちのひとつである礎石建物（中井 1990）が出現し他地域でも礎石建物が導入される時期になると、桑下城の事例のように門においても礎石を用いた門が出現するようになることがわかる。そんな中、織豊期以前に礎石で構成された門とともに石造りの階段が存在した上ノ郷城は他城郭ではみられない事例であるといえる。

(3) おわりに

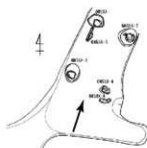
報告書において門遺構の報告はあるものの門の形式を特定するまでに至っている事例はわずかであった。遺構から門の形式を断定することは困難であることは承知であるが、門構造を推定することではじめて各城郭との関連性や虎口の本質的価値を見出すことができるのではないかと考える。美濃金山城跡の主郭以外の他の曲輪の入り口部分の構造は今後の調査の進展により明らかになり、主郭との構造の対比が可能になっていくであろう。また、他の城郭の調査、研究が進み、入り口の門構造に注目が集まっていくことを期待したい。

<参考・引用文献>

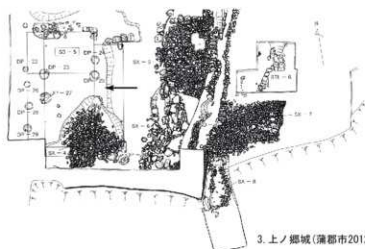
- 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2013 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 181：桑下城跡』
愛知県埋蔵文化財センター 1996 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 69：鳥羽城跡』
イビツ古城名古蹟支店 2013 『新城城跡発掘調査報告書Ⅱ』
岩崎城跡発掘調査団 1987 『岩崎城跡 発掘調査報告書』
可児市教育委員会・滋賀県立大学 2019 『国史跡美濃金山城跡発掘調査概報』Ⅱ 可児市埋文調査報告 55
河西克浩 2001 『甲信越地方における織豊期城郭の礎石建物』『織豊城郭』第 8 号 織豊期城郭研究会
藤原市教育委員会 2012 『上ノ郷城跡Ⅰ』
木戸雅孝 2001 『近江における織豊期城郭の礎石立建物について』『織豊城郭』第 8 号 織豊期城郭研究会
岐阜県文化財保護センター 1992 『鶴尾山城跡・深戸遺跡』
岐阜市・岐阜市教育文化復興事業団 2023 『岐阜城跡Ⅵ』
五島昌也 1996 『名護屋城（本城）跡発掘建物遺構集 第 1 集～礎石建物跡（門跡）～』『研究紀要』2 佐賀県立名護屋城博物館
千田嘉博 1987 『織豊系城郭の構造―虎口プランによる縄張編年の試み―』『史林』70 巻 2 号 史学研究会
高山徹 1999 『虎口に関する一考察―普請と作事の関係を中心として―』『城郭研究室年報』第 8 号 姫路市立城郭研究室
高山市教育委員会 1986 『高山市埋蔵文化財調査報告書 10：高山城跡発掘調査報告書』
高山市教育委員会 1988 『高山市埋蔵文化財調査報告書 14：高山城跡発掘調査報告書Ⅱ』
多田暢久 2001 『織豊期城郭における軽量礎石建物について―近畿地域の障城事例を中心に―』『織豊城郭』第 8 号 織豊期城郭研究会
土岐市教育委員会・（財）土岐市埋蔵文化財センター 2002 『妻木城・妻木城跡・土屋敷跡発掘調査報告書Ⅰ』
中井均 1990 『織豊系城郭の画面―礎石建物・瓦・石垣の出現―』『中世城郭研究論集』新人物往來社
中井均 1999 『虎口「空間」について』『織豊城郭』6 号 織豊期城郭研究会
鳳来町教育委員会 2004 『史跡長嶽城跡（Ⅲ）』
正見泰 2016 『近世城郭における城門の配置と形式の関連性―金沢城を事例として―』『建築史学』第 67 号 建築史学会
松井一明 2016 『戦国期～織豊系城郭の門跡―門遺構研究の方向性を探る―』『織豊城郭』第 16 号 織豊期城郭研究会
松田直樹 2017 『四国における城郭の礎石建物』『織豊城郭』第 17 号 織豊期城郭研究会
溝口彰吾 2012 『虎口』『季刊考古学』第 120 号 雄山閣



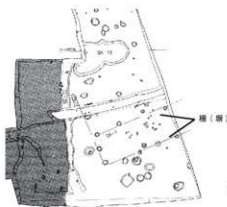
1. 岩崎城 (岩崎城跡1987)



2. 桑下城 (愛知県埋文2013)



3. 上ノ郷城 (蒲都市2012)

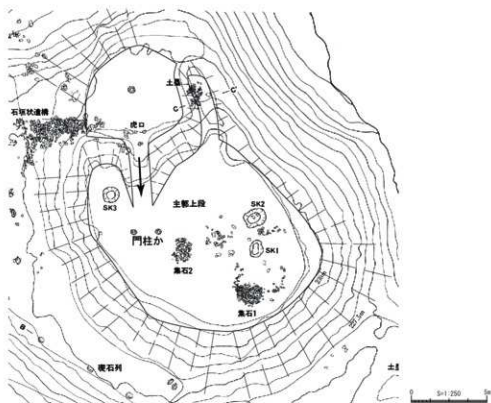


4. 長篠城 (鳳来町2004)

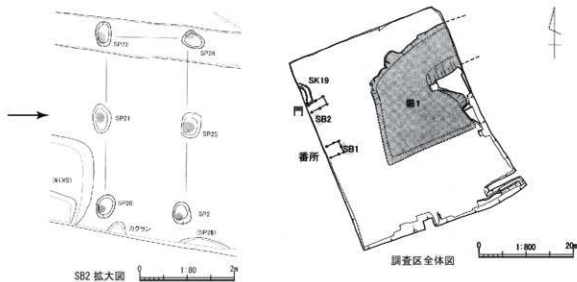
* 矢印は入口の導線を示す

0 5m 200 5m

第54図 各城跡の主郭入り口施設 (1)



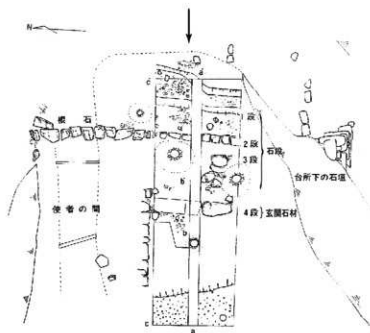
5. 鶴尾山城(岐阜県文化財1992に加筆)



8. 新城城(イビソク2013)

* 矢印は入口の導線を示す

第55図 各城跡の主郭入り口施設(2)



9. 高山城(高山市1988)



10. 美濃城(土岐市2002)

第56図 各城跡の主郭入り口施設 (3)

	城名	築城年代	所在地	遺構	礎石/柱穴数	形式	備考
1	岩崎城	天文7年	愛知県石岡市岩崎町	柱穴	8		天正12年改修。慶長5年廃城。
2	龜子城	15世紀後半以降	愛知県瀬戸市上品野町	礎石	4		大塚第2・3段間の遺物出土。永禄3年以降に築城。
3	上ノ郷城	不明	愛知県豊都市神ノ郷町	礎石	2		天正10年築城。
4	長篠城	永正5年	愛知県新城市長篠字市場	柱穴	8	櫓	天正4年築城。(遺物はもう少し新しい)
5	鶴屋山城	天文10年	岐阜県郡上市鶴屋町	柱穴	2	櫓門	16世紀末築城。
6	鳥羽城	天文10年	愛知県西海市鳥羽町	柱穴	2	櫓門	天正10年築城。
7	岐阜城	建仁元年	岐阜県岐阜市金華山	石垣			永禄10年織田信長入城・改修。慶長5年築城。
8	新城城	天正4年	愛知県新城市宇重入町	柱穴	6		正徳2年築城。
9	高山城	天正13年	岐阜県高山市城山	なし			元禄8年築城。上段の本丸腰射入口には玄關門。
10	妻木城	慶永年間	岐阜県土岐市妻木町	礎石	3	薬師門/櫓門	慶長5年前後改修。万治元年築城。(山麓)

第5表 織豊期城郭の入り口における諸施設一覧

図版1



第10次調査前風景（南西より）



第10次調査トレンチ完掘状況（北より）



第11次調査トレンチ完掘状況（西より）



d-d' 土層（北より）



SD20石材出土状況（西より）



c-c' 土層（南より）



石橋遺構調査前風景（南より）



10-1トレンチ完掘状況（東より）

主
郭

東
I



10-2トレンチ完掘状況（西より）



11-1トレンチ完掘状況（北東より）



11-1トレンチ断ち割り完掘状況（東より）



11-2トレンチ上層整地土検出状況（北西より）



11-2トレンチ上層整地土下石検出状況（東より）



11-2トレンチ断ち割り完掘状況（東より）



11-3トレンチ調査前風景（西より）



11-3トレンチ完掘状況（西より）

図版3



11-4トレンチ完掘状況（西より）



11-4断ち割りトレンチ完掘状況（北より）

東
I



米蔵跡トレンチ調査前風景（南より）



江戸時代造成土面検出状況（北より）

米
蔵
跡



トレンチ完掘状況（西より）



トレンチ北壁土層（南より）



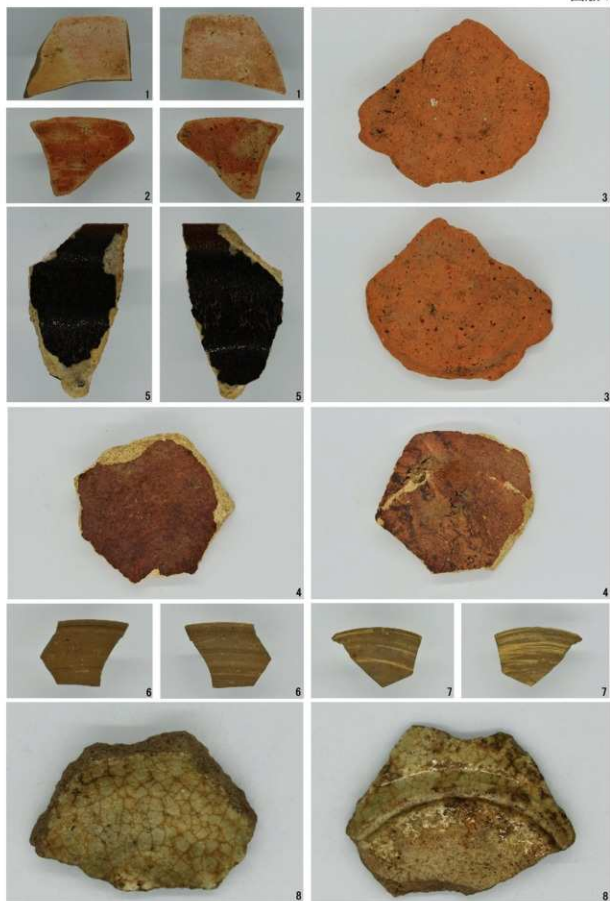
r-r' 土層（北西より）



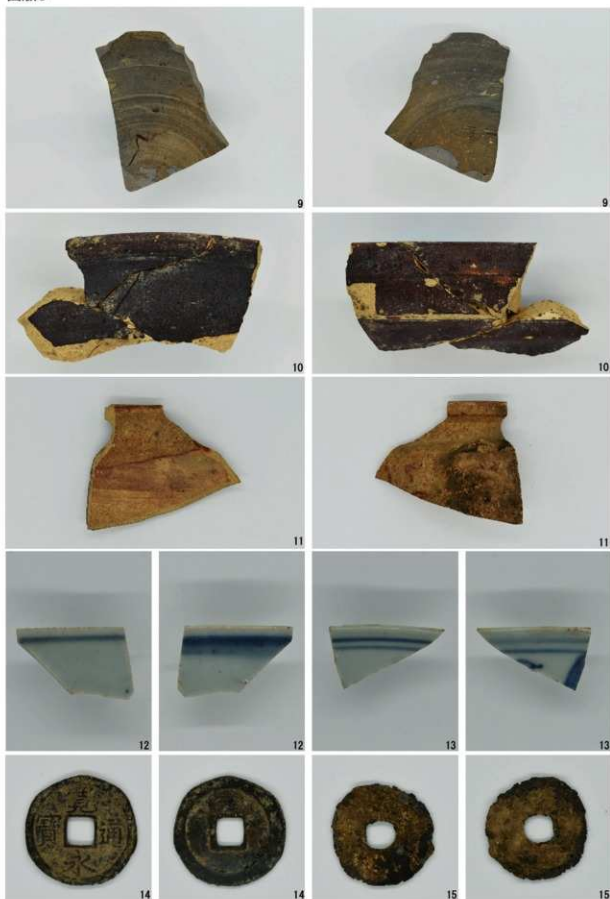
トレンチ内瓦出土状況（西より）

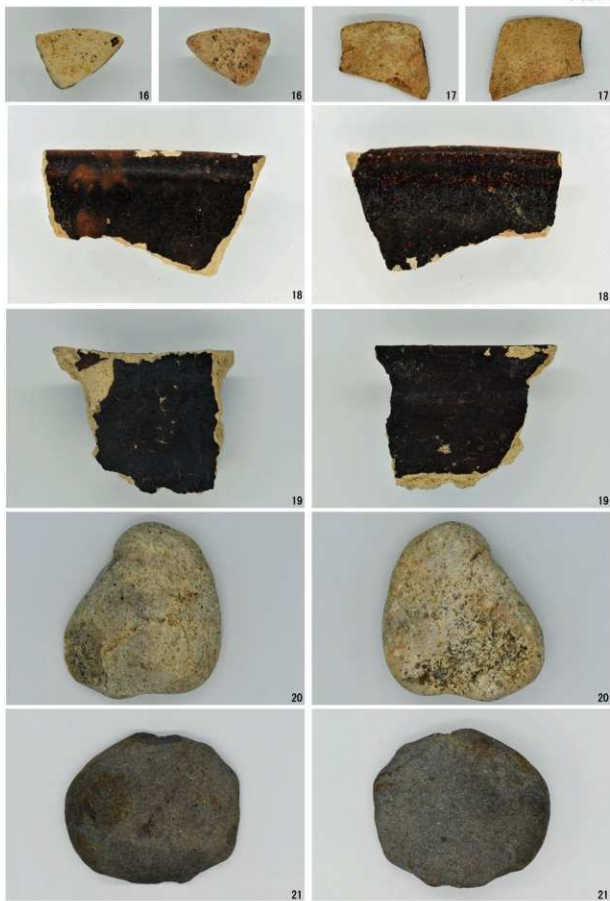
西
II

图版4



图版5





図版7





27



27



28



28



29



29



30



30

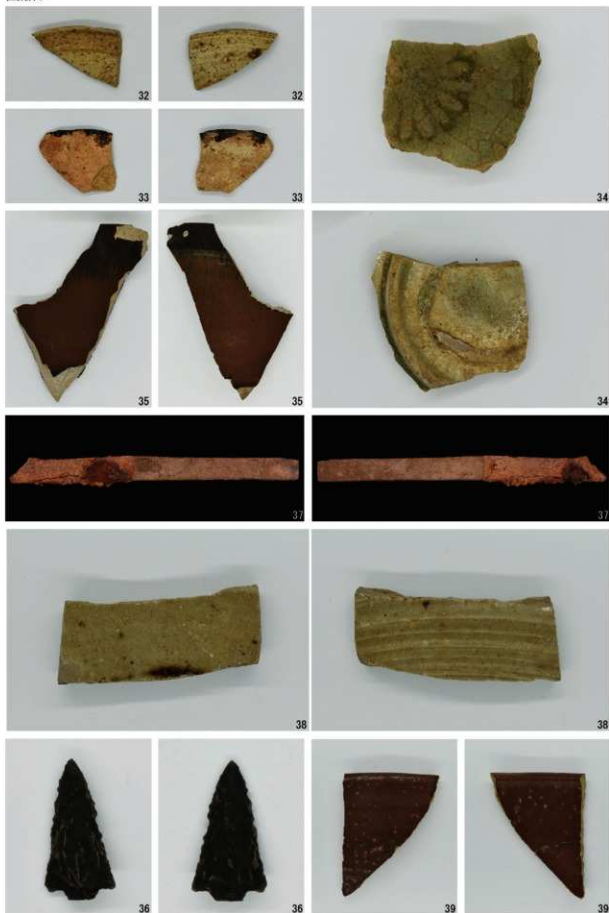


31



31

図版9





報 告 書 抄 録

ふりがな	みのかねやまじょうあとはつちつちようさほうこくしょ 2						
書 名	美濃金山城跡発掘調査報告書 2						
副 書 名	主郭・東Ⅰ・米蔵跡・西Ⅱ						
巻 名							
シリーズ名	可見市埋文調査報告						
シリーズ番号	59						
編集者名	長江真和 佐藤亜聖 金宇大 幸田朱加 中村優月 荒川菜々子 市川大翔 大八木智華 草野莉青 栗山葉路 小林風雅 高野航太郎 立石廉 田中美沙希 西村空 保谷里歩 堀絢音 山田梨紗子 柚木重敬 吉田実華 米山さくら						
編集機関	可見市 経済交流部 歴史資産課						
所 在 地	〒509-0292 岐阜県可見市広見一丁目1番地						
発行年月日	西暦 2025 年 3 月 31 日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間 面 積	調査原因
所収遺跡名	所在地名	市町村	遺跡番号				
みのかねやま 美濃金山城跡	岐阜県 可見市 兼山 1418-211	21214	4477	35° 27' 23"	137° 05' 49"	第10次 (20 m) 20220829~0911 第11次 (48 m) 20230821~0917	遺跡の内容 確認、整備の ための事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
美濃金山城跡	城館跡	中世	石垣、礎石	瀬戸美濃産陶器、 かわらけ、中国陶磁、 瓦		令和4年度から5年度に行 った第10・11次調査の調査 成果報告。主郭の出入口部分 と東Ⅰの石橋遺構部分の構 造を確認した。	

可見市埋文調査報告 59

美濃金山城跡発掘調査報告書 2

令和7年3月31日 印刷

令和7年3月31日 発行

編集・発行 可見市経済交流部 歴史資産課

〒509-0292 岐阜県可見市広見一丁目1番地

Tel 0574-62-1111 Fax 0574-63-6751

印刷 有限会社ヤマモト印刷